

# 探偵見習いの物語 REMAKE

海人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

あらゆる場所で風車が回る都市、風都。

ミュージアムの実質的な崩壊により、ガイアメモリによる犯罪は数を減らしていたが根絶には至っていない。

これはそんな街に住む俺……氷川真昼のお話である。

# 目次

プロローグ	
プロローグ	1
プロローグ 2	11
1話	
Fの仮面／黒の死神	16
Fの仮面／過去からの……	23
Fの仮面／チェックメイト	29
Fの仮面／始まりは再び手元に……	36
主人公設定	45
幕間	
Hとの出会い／鏡獣襲来	48
Hとの出会い／亡霊からの依頼を聞き……	56
嵐と守護者と騎士達と	61
2話	
Kを纏う者達／風の祭りは賑やかに	70
Kを纏う者達／風の祭りは賑やかに 2	84
Kを纏う者達／風の祭りは賑やかに 3	92
Kを纏う者達／風の祭りは賑やかに 4	99
幕間 2	
Pとの邂逅／相棒と友達と猫友と	106
Pとの邂逅／繋がる縁	115

プロローグ  
プロローグ



———  
おい小僧、お前は妹達をどう思っているんだ？  
———

今は亡き師匠のその問いにこの時の俺はこう叫んでいた。

2人を嫌いになんてなりたくない、と。

だから俺はそれを気づかせてくれた師匠<sup>あの人</sup>……

『鳴海 莊吉』の2番弟子になることを選び、住んでいた家と家族から  
離れて風都に移り住んだ。

そしてこの選択が俺に

数多の出会いと

幾つかの別れと

腐れ縁と呼べる友達をくれたんだ。



季節は春。

学生にとって新学期の始まりの時期でもありクラス分けが発表される日。

そんな日に僕は……

「ちくしょう、寝過ごしたあああああああ！」

そう叫びながら全力疾走する男、腐れ縁の氷川真昼に追い抜かれ

た。僕こと吉井明久は走る速度をあげ真昼に追いつきながら話しかけていた。

「おはよう、真昼」

「……あ、おはよう明久」

挨拶しながらも真昼は走る速さを落とすことなく駆け続けながら話しかける。

「真昼ってこんなギリギリに登校したっけ？」

「いつもならもう少し余裕をもって登校するわ！ 明後日の大会用の『GN<sup>ガ</sup> ARMS<sup>ン</sup>—type<sup>プ</sup>D』の調整と改造してたら寝落ちしてたんだ！ そう言う明久は……徹夜でゲームでもしてたのか？」

「流石真昼だ。よく分かったね」

「分かってても嬉しくないな！ ってか後何分だ？」

その言葉に互いのスマホを取り出してみて確認する。  
表示された時刻は……

08:24

ちなみに僕達の通う文月学園の遅刻に設定されている時間は

08:35

「……………」

全力疾走しながら互いを見つめあい、頷く。

「今こそ限界を超える時だあああああああ!!!」

この日、極一部の地域で突風に見舞われたそうだよ。

「遅刻じゃないですよね、鉄・・・村先生?!」

「遅刻じゃないが名前を中途半端に間違えるな!　というわけで時間が惜しいならこれを貰って移動しながら見ろ」

校門に待ち構えていた高等部の補習教師『西村 宗一』、通称『鉄人』に軽く怒られながらも試験結果が書かれた紙を入れた封筒を受け取り鉄人と話す真昼を置き去りにして校舎に入る。

「西村先生、奴等はどうになりましたか?」

「氷川、その件だが俺が担当になった。お前達にも協力してもらおうかな・・・まあ巻き込まれると思うから今のうちに謝っておく、悪いな」

「それとお前と吉井、今年が良い1年を送れると思うぞ」

・・・真昼と鉄人の会話の内容を聞くことなく。

「頑張ったんだ、あの2人と一緒に嫌だ」

「妖怪関節碎鬼と妖怪劇物調理人だな・・・去年みたいな事がないように祈つとくよ」

文月学園高等部。

二年次以降の振り分け試験の成績で厳しくクラス分けされるこの学園、真昼の言葉を聞きながら封筒を開けて折りたたまれた中の紙を広げる。

そこに書かれたのは……

吉井明久 Aクラス 『末席』

氷川真昼 Aクラス

互いに顔を向き合わせ考え込む。

『末席』ってセーフとみて良いのかな?」

「微妙だな。とにかく教室へ行くぞ」

「どうかあの2人が居ませんように」

もし、あの2人が居たら師匠からあの大技を伝授させてもらおうと  
考えながら居ませんように居ませんように(×100)、と祈ってAク  
ラスのドアを開けた。



「やっぱ凄いなAクラス」

「だよね」

Aクラスを見た俺の感想に同意する明久。

普通の教室の5倍はある広さに黒板のあるべき場所には壁一面は  
ある大型プラズマディスプレイ。

更に生徒1人1人にノートパソコン、エアコン、冷蔵庫、リクライ  
ニングシート、お菓子まで備え付けられている。

ハッキリ言ってやろう。

「Aクラス最高」

「だよな、って2人とも中入れよ」

そう言っ手招きする去年の2年Fクラス代表坂本 雄二を見つ  
け教室に入る。

「雄二もAクラスなんだね」

「秀吉とムツツリー二もAだ」

「頑張ったからな」

「まったくじや」

腐れ縁5人組が集まったので丁度良いと雄二達に尋ねる事にする。  
それは向こうも予測していたので割とスムーズに話せた。

「ところで奴等はどうなった?」

「2人ともFクラスだ」



雄二の言葉に明久はガッツポーズをして喜びを顕にしている、事情を知る俺達はなんとも言えなくなる。

「関節碎鬼は納得するが劇物調理人もか？」

「凄い異名だな……まあナイスネーミングと言っておこうか」

「去年みたいいに試召戦争を仕掛けてくるかの？」

「秀吉の懸念は理解できる、実際3年Fクラスの代表は姫路だ」

その言葉に喜びの踊りを踊っていた明久の動きが止まりその顔色が蒼白になっていく。

このおバカにトラウマを刻み込んだあの2人は正直凄いと悪い意味で思う。

「だが仕掛けるかの？」

「戦力差が酷いからな」

秀吉と雄二の言葉を尻目に把握した情報を整理していく事にして……笑いたくなるくらいに安堵した。しかも雄二からの追加情報が凄かった。

「Aクラスは俺達に霧島、木下姉、工藤、久保、残りのAクラスの連中だからな」

「真昼は知らないと思うが桐ヶ谷、朝田、土見、八重の4人もAクラスだぞ」

「なにソレ怖いわー」

因みに今、名前が出た4人だが去年俺と同じCクラスだったので人柄は良く分かるし実力は把握している。

つまり……

もう何も怖くない！

ってか今年の学生生活は厄介事はないな。

去年は竹下や常村&夏川や妖怪共のせいでライダーバトルとは別の意味で殺伐としていたしな。けど念のために尋ねとこう。

「ムツツリーニ、他のクラスは？」

「Bクラスは根本が代表だ」

去年と同じく今年もアイツがBの代表かと思うが俺を含む去年FとCの9名がAクラスにいるってことは……

「根本の奴、俺達いなければAクラスだったんだな」

「いや、彼奴と同じクラスは勘弁してくれ」

俺の呟きを聞いた雄二は吐きそうな顔でそう言っていた。何故か去年Fクラスのメンバーと周りのAクラスの全員も同じ反応してるし……おい、何があつたお前ら？

「Cクラスは藤丸、Dクラスは清水だ」

藤丸は去年のクラスメートでCクラスの5人が抜けたなら繰り上げで代表になっても可笑しくない学力とコミュニケーション能力が高い女だ。因みに常識人。

問題は……

「関節碎鬼オレガの眷属が代表つてヤバくね？」

「去年は平賀君だったよね？どうしてこうなった？」

Dクラスは要チェック対象確定だな。

「Eクラスは？」

「転校生らしい、詳しくは現在調査中」

「なら後日判断を下そう」

「警戒するのはB、D、F。調査結果次第でEもか」

訂正

俺達は今年も何らかの騒動に巻き込まれるだろう。



「これよりHRを始めます」

授業開始のチャイムが鳴ると同時に現れた3年Aクラス担任の高

橋先生は教室に入ってくるとHRを始めた。

「まず始めに、2年末に行われた振り分け試験により今年からAクラスに入った人達の自己紹介から始めましょう」

高橋先生の言葉に明久、雄二、ムッツリーニ、秀吉が軽く自己紹介をする。

で次が俺達元Cクラスの番だ。

「では次、氷川君達どうぞ」

「はい。去年、Cクラス代表だった氷川 真昼だ。趣味は読書と模型造りに食べ歩き、特技は料理とギターを弾く事。」

「桐ヶ谷 和人、趣味はゲームとバイクかな。後はパソコン関連が得意で遊戯部の部長でもある、興味があつたら見に来てくれると嬉しい」

「朝田 詩乃、遊戯部の部員で和人の彼女よ。趣味は読書で料理がそれなりに出来るから家庭料理研究部にも籍をおいてるわ」

「土見 稟。家庭料理研究部の部長で最近ガーデンングに填まってる、後『食べられる野草シリーズ』は一度読む事をお勧めする。趣味は1人旅だ」

「八重 桜です、家庭料理研究部の部員で手芸部にも在籍してます、趣味はぬいぐるみを作る事かな。一年間よろしくお願ひします」

「以上、9人が新しくAクラスの生徒になります」

高橋先生の締め言葉でHRは終了した。



そして始業式を始めとした諸々が何事もなく終わり放課後になった。

「可笑しい、普通に終わった?」

「違和感しか感じねえ」

「雄二も? 僕もだよ」

真昼の言葉に答える俺に明久も返事をし、秀吉とムッツリーニも今

の状況に戸惑いを隠せずにいた。

「Fクラスなら即座に仕掛けてくると思ってたんじやが」

「動きが全くないのがこうも不気味に感じるとは」

全員が帰宅準備を行いなながら考え込む中で真昼が口を開く。

「朝、聞いたんだがFクラスの担任は鉄人らしいぞ。本人から聞いたから間違いない筈だ」

「マジか？」

「マジだ。だからこそ動きが無かったんじやないか？」

「鉄人が抑えてるって事？」

「それ、逆に怖いぞ」

真昼の言葉に一安心する明久の言葉に反論する俺、真昼以外はこういうこと？って顔してるからな。って訳で真昼、説明任せた。

「ああ。『Fクラスが動く』鉄人でも抑えきれなかった』だからな」  
「だよな」

真昼の溜息混じりの結論に俺もため息交じりで相槌をうった。すると明久がとんでもないことを言い出した。

「これ、奴等の作戦って事はないかな？」

「『作戦？』」

「まさか……警戒させ続けることで俺達を疲労させようとしてるんじゃないかって……とか？」

「うん、考えすぎかな？」

「Fクラスの奴等にそこまで考えられる知性があるとは思えない」

真顔で何気に失礼な真昼の言葉に反論するムツツリー二の言葉に俺達は即座に頷く。

「万が一って可能性はあるし……暫く警戒し続けるしかないか」

「霧島達にも話した方が良いかもしれないな」

「姉上達を巻き込みたくないんじやがな」

「秀吉、明久とお前の姉がカレカノの時点で巻き込まれるのは確定してるぞ」

真昼の言葉に顔を覆い座り込む秀吉。

「ドンマイ」

「なんか、ゴメン」

「明久が謝ることじゃないぜ」

「全くだ」

今回の集まりはここまでと言った雰囲気が出来始めたその時、

ピンポンポンポン

「……3年Aクラス氷川 真昼。直ちに学園長室に来るよう  
に。繰り返す……」

学園長からの呼び出しが学園に響いた。

「真昼、学園長がお呼びだぞ」

「俺、何かしたか？」

首を傾げながら真昼は俺達と別れて学園長室へと向かった。

To be continued……

## プロローグ2



……お前に…コレを……くれて……やる…  
そう言って投げ渡されたのは叶えたい願デいを持つ者ナの証にして  
闘技場招待への入場券の役目を担うカードモデッキ  
これが最初で……最後の…頼みだ……真昼！  
ヤツを…神崎 士郎を最後の勝者勝者の1人に……するなツ!!…



「失礼します」

「急に呼び出して悪かったね」

学園長室に入った俺の耳は信じられない言葉を拾ってしまった。

「ババアが労りの言葉を口にした?!」

「口が悪いねえ」

呆れた口調で何を仰る、学園長？ 去年で随分と厄介事に関わる羽目になったからな。いきなり労りの言葉を述べられたら驚くわ。

「まあ、良いさ」

「……厄介事か?」

俺の無礼極まりない言葉を受け流した時点で何か合ったと疑い尋ねた。

「違う、この御方があんたに会いたいと言って訪ねて来たから呼んだだけさ」

「……久しぶりだね、『リュウガ』君」

背後から聞こえた声とその呼ばれ方に驚き慌てて振り返る。俺を『リュウガ』と呼ぶという事はあの『ライダーバトル』に深く関わった人物である事を示す意味があるからだ。

「…貴方は?!」

振り返った先に居たのは最後に会った時は一命をとりとめたが昏

睡状態になってしまった人の面影を残していた。一度目にした物は絶対忘れることのない「瞬間記憶能力」の持ち主であり、神崎 士郎の目的の全容を自ら解明しミラーワールドによる脅威を止めるために自らも戦った人。

そう、その人の名は……

「お久しぶりです、香川教授」

「…本当に久しぶりだ」

『西暦2002年』の『龍騎の物語』で出会った疑似ライダー『オルタナティブ』を作成した天才、香川 英行だった。

「香川教授と知り合いかい？」

「彼は私の命の恩人でしてね」

「……ライダー関連かい？」

俺と教授の会話を聞き口を挟んだ学園長ババアの言葉に僅かだが表情を曇らせ問いかける教授を見て慌てて弁明する。

「…リュウガ君？」

「今の俺は『リュウガのカードデッキ』を所持してません。神崎 士郎との最終決戦で破壊、されました」

最終決戦。

俺がそう呼ぶライダーバトルの最後の戦闘、終わりが迫り業を煮やした神崎 士郎が直接変身をした仮面ライダーオーティンと連兄……秋山 蓮、仮面ライダーナイトとの共闘した一戦。

その戦いで俺が『最後の1人』ライダーバトルの勝者になったが同時に所持していた『リュウガのカードデッキ』を神崎 士郎によって破壊された。

「…そうか」

「詳しくは別の場所で話しませんか？」

学園長此処室処って盗聴器を仕掛けられたことあるからなあ。

「では君のお勧めのお店を紹介してくれるかい」

「喜んで」



西暦2002年、日本国首都東都。

この街では、人々が忽然と失踪する事件が連続発生していた。極めつけは湧き出るように現れた未確認生物による街への半日間の蹂躪劇。

そしてその事件の真相を知る者は現在いまにおいて極一握りしかない。

「……以上がライダーあバトル戦いが行われた理由です、教授」  
「そうか」

彼、氷川真昼に連れられた喫茶店『白銀』にて彼が辿り着いた事実を聞き終えた。

私が『龍騎あの物語時』を思い出しながら頼んだコーヒーを楽しんでいると彼の口からとんでもない言葉が零れていた。

「教授、俺は神崎 士郎を完全に否定できないんです」  
「どうしてかな？」

問いたです声に彼は考えながらその言葉を口から出していた。

「…俺にも2人、妹がいるから。だから思うんですよ、もし延命助けする手段があるのならそれに手を出したな。って」

「だけど否定出来るのだね」

私の言葉に彼は直ぐに言葉を返してくれた。

「はい、『ミラーモンスター』に殺された人達、ライダーという存在に関わって人生を歪められた人達を知ってるから……」

「迷うのは必要だと私は思う。……迷う事が人に与えられた特権、なのかもしれない」

「そして答えを出すことも、ですね」

そうだ、と返事をした後で気になる事を聞く。



「さて1つ、聞きたいことがある」

「どうぞ」

「カードデツキを所持していない君がなぜ藤堂学園長から「ライダー」と呼ばれたのか？」

「……他言無用でお願いします」

そう言い彼は制服の懐から取り出した物、「E」のアルファベットが描かれた市販されている物より大型なUSBメモリとそれを差し込む蒼を基調とした端末のような何かをテーブルの上に広げる。

「これは？」

「「ガイアメモリ」と「シングルドライバー」。「カードデツキ」とはまた別の「ライダーシステム」です」

その言葉に驚く私を見て彼は苦笑する。

「驚きますよね」

「当然……と言いたいのだが「G5」の例がある」

「後は泊刑事、「仮面ライダードライブ」もいますからね」

かつては都市伝説としてだったが『龍騎あの物語時』と違い『仮面ライダー』の名前だけは一般的に知られている。

特に有名なのがグローバルフリーズを切っ掛けに存在を認知された『ロイミュード』と戦った特殊状況下事件捜査課の泊 進ノ介巡査部長が変身する「仮面ライダードライブ」だ。

「では君は？」

「ガイアメモリ犯罪対策特化の仮面ライダーですね。その関係で一部の警察にも顔は知られています」

「ほう、ならば泊刑事とも面識ありなのかい？」

「何度か共闘したりしてます」

「この言葉に私は出かけた溜息を止める、つまり彼は今も戦い続けているのか。と思いながら。」

「では失礼するよ」

「はい、縁があればまた」

「……そうだ」

そう言っつて香川教授は懐から取り出したメモ帳から一ページを破り取って何かを書きそれを俺に渡してきた。

「これは？」

「私の携帯端末の番号だ、相談したいことがあつたら連絡するといひ……なんだつたら清明院大学を受験しないか？」

「清明院大学つてレベル高いですよ」

「君ならやれるさ」

推薦状を書こうか？ そう言つた香川教授と俺は一緒に喫茶店『白銀』を出た後別れて寢床に帰る。

「…清明院大学か、調べてみようかな」

スマホを取り出し連絡先を保存しようとした時、ズボンの右ポケットにいれていたスタッグフォンから振動したのを感じ保存を済ませてスタッグフォンを取り出し発信者の名前を確認し通話状態にする。

『もしもし。お久しぶりです師匠』

「久しぶりつて1週間も経つてないぞ。お前が仕事用のスタッグフォンに電話するなんて珍しいな『六花』」

To be continued……

1話

Fの仮面／黒の死神



ドウスレバイイ？

メノマエニアルソレヲミオロシオレハソレダケヲカンガエル

ミツカツテハイケナイ…

イソイデカクサナケレバ…

コレヲケサナケレバ!!

「……………お、母、さん…?……………」



3年生に進級して幾日が過ぎたその日もいつも通りに過ぎたと思う。

あの吉井ミラクルバカ 明久にAクラス下位レベルの学力を身に付けさせると言う偉業レジェンドを為し遂げさせた功績？も追加された偉大にして規格外な御方、鉄人がこう言わなければだけど……

「氷川。放課後、学園長室に來い……厄介事だ」

「いきなりすぎませんか？まあ、予定がないから良いですけど……拒否権無いし」

この際、ここで説明したほうが良いか？

実は俺、2年生の時に色々やらかしその結果として単位&出席日数が不足し留年をくらいかけた為こうやって学園長の指示する雑用と厄介事をこなすことでその不足分を埋めてもらう裏取引が成立しているのだ!!

そして放課後。

「婆さん。遅くなつて悪い」

「言葉に気を付けな、『このバカガキが』」

「何時の日か改めますよ『学園長』……」

ノックをして学園長室に入る俺を容赦無い御言葉で出迎えてくれた学園長ババアこと藤堂 カヲルから厄介事が入った事を告げるキワード隠語を伝えられ俺が了承した事を告げる。

「それで、今度はどんな事情ですか」

「今回の話を持ってきたのは中等部の刀藤さ。刀藤、話してくれないかね」

学園長室にいたのは学園長と鉄人、そして中等部の制服を着た女の子の3人だった。

学園長に促された刀藤の話の聞いてみると明らかに厄介事だと分かった。

「生徒と担任を含めた刀藤さんのクラス全員」が刀藤さんの友達の『羽柴 旭』さんを覚えていない？」

「…はい」

相談内容は自分以外のクラスメイトが『1人のクラスメイトの存在を覚えていない』異常事態についてだった。

「刀藤さんだけが覚えているのに心当たりはある？」

「昨日、家の用事で学校を休んだことぐらいでしょうか？ 剣道部の友人に尋ねてみたらクラスで休んだのは私だけでしたから…」

「昨日刀藤さんのクラスで『何か』がおきた。だから昨日<sup>そ</sup>の<sup>場</sup>に居なかった刀藤さんは『何か』の影響を受けなかった」

自分で『何か』と言いなながらも思い当たるモノがあった。

「学園長、俺に話が来た理由は？」

「実は6月下旬にアイドルグループのメンバーが体験入学に来るって企画が今持ち上がってるんだよ。だから警察とか外部にあんまり知られたくなくてね。まあ、氷川が駄目だったら鳴海探偵事務所経由で風都署超常犯罪捜査課に口利きを頼もうかと思つとる」

「ああ、そういうわけで……なら学園長」

「学園のデータベースを使う為かい？」

「この一件、『ガイアメモリ』が関わるなら情報は多い程良い」  
最終手段<sup>兄</sup>を頼るにしても検索の選択肢を出来るだけ減らせるようにしたいからな。

「仕方ないね、西村先生」

「了解しました。氷川、生徒指導室のパソコンを使うぞ」

「はい。じゃあな、婆さん」

了承した俺は西村先生に連れられ学園室を後にした。



「データは有るって対応が雑すぎ」

「そうだな」

学園長室から戻った俺と鉄人は生徒指導室のパソコンを起動させ鉄人のアカウントを使い生徒情報の閲覧をしていた。

氏名：羽柴 旭

クラス：2―C

性別：女

新学年時確認試験成績

現国	134点
数学	213点
地理・公民	245点
日本史	315点
英語	371点
家庭科	162点
美術	164点
保健体育	102点
理科	147点

テストの点数は悪くない方か……

そんなことを考えていた俺に鉄人が口を開き教えてくれた。

「あれから個別に確認したが中等部の教師陣はクラス担任以外は羽柴の記憶が有ったそうだ」

「羽柴の部活動関係は？」

「帰宅部だ、友人も少ないらしい」

その数少ない友人の1人が刀藤か。それならなんで刀藤が居ない日に行動に移した？鉄人も同じことを考えていたのか会話の内容もそれになる。

「行き当たりばったり感がありすぎる」

「氷川の言うとおりでだな、ということは計画的な犯行ではないのか？」

「それだったら犯行時間は一昨日おとといから昨日になる、のか？どんなメモリを使ったらこんなことになるんだろ？」

「どんな能力のメモリだと氷川をは考える？」

鉄人に問われて考え込んだ俺は口に出した。

「忘れる……消去？ 忘却？ 若しくは嘘？」

「消去と忘却は分かるが嘘だと思っ根拠は？」

「対象に『羽柴 旭は居ない』と言う嘘で記憶を上書きした、なら嘘でも対応出来るかなと」

まだ何かが見えてない気がする。

それが判れば……

「なるほどな、刀藤の事を考えると羽柴と関わりが浅い人間が犯人か？」

「……それも一応候補に入れときましょう、ところでどうします？」

「羽柴の自宅に行くのか？ 俺も行きたいんだか……バカ供の補習があつてな……」

俺が尋ねると溜め息を出しながら口にした言葉に納得してしまった。

「俺が行くから羽柴の自宅の住所教えてください」

「頼む」

先生もバカ供の補習頑張って下さい。



「教えてもらったマンションは次の角を右に曲がってまっすぐ10分ほどだな」

あれから俺は学園を出て鉄人に教えてもらった羽柴の住所に向かって歩いていった。

……キイイイイイン……キイイイイイン……

「…は？」

そして聞き覚えがある、有り過ぎる……だが、この世界では二度と聞こえる筈のない金切り音に呆けた声が漏れる。

だがそれと同時に少し先に置かれたガードレールから長い尾羽のような物が伸び巻き付こうとしたのを間一髪で避ける。

それを見たのかソレは此方側にその姿を現す。

「ミラーモンスター?! ウソだ…ろっ!!」

有り得ない存在からの攻撃を回避しながら距離をとりつつ懐から取り出したシングルドライバーを腹に添え、ベルトで固定されたのと同時に右手に握る白色のガイアメモリのスイッチを押す。

【ETERNAL!!】

そして『永遠』を意味する単語がガイアメモリから発せられる。



「…変身！」

【ETERNAL!!】

そして起動させたエターナルメモリをシングルドライバーのスロットに挿し込み斜めに倒す事で俺の周りで青白い電流が迸り、風によって舞い上がる黒い塵が全身を包みその姿を変えた。

それは一度、この街風都を救地獄にお変えようとした『仮面ライダー悪魔が変身した姿』に酷似しており……

そして、あの時の俺が望んだ力を持つ『仮面ライダー仮面ライダー』だった。  
To be continued……

Fの仮面／過去からの……



「まさか、今になってミラーモンスターを相手にするなんてな」

エターナルに変身した俺はコンバットナイフ型エネルギーナイフ、エターナルGエッジを右手に握り目の前に在るミラーモンスター……ガルドサンダーに対峙しながら困惑を必死に隠し思考を続ける。

(……この世界の時間軸なら俺がミラーワールドを閉じてから10年以上経っている筈、その証拠に今まで遭遇しなかったしな)

「なあ、俺を無視してミラーワールドに帰ってくれねえ?」

『シャアアツ!!』

「考えるのは後で、だな!」

雄叫びを挙げ口から火炎弾ではなく衝撃波を放つモンスターにそう叫ぶと同時に俺は左手に現時点で所持するガイアメモリの1つを呼び出しエターナルエッジのグリップ部分のマキシマムスロットに装填、起動させる。

【CYCLONE!!】

疾風<sup>風</sup>を意味する単語<sup>スベル</sup>が発せられると同時にエターナルエッジの刀身部分に風が纏われる。

「オラアアアアアアアツ!」

『シャアア?!』

叫ぶと共にガルドサンダー目掛け駆け出しエターナルエッジを横風ぎに振るい衝撃波を切り裂きその勢いを止めずに接近、胸元を十字に切りつける。

「……悪いけど、これでサヨナラだ!!」

【LUNA!!】

更に呼び出したガイアメモリを右腕部分のマキシマムスロットに装填、起動させ幻想・神秘を意味する単語<sup>スベル</sup>が発せられる。

【CYCLONE！ LUNA！ MAXIMUM DRIVE！】

宣告と共に造り出した分身4体で囲み2体で上半身を切り裂き、残りの2体で地面に叩きつけエターナルエッジに装填させたメモリを起動させエターナルエッジの刀身部分が蒼く輝き纏う風が凝縮される。

「ファントムブレイザー!!」

そして振るエターナルエッジから放たれた風の斬撃がガルドサンダーの身体を切り裂き爆発させた。



「時間が係ったな」

ガルドサンダーを倒した俺は早足で羽柴の住所欄に書かれたアパートに向かうが其所は何故かパトカーが複数留まり制服警官が辺りを警戒し規制線が敷かれていた。

「これ何事？」

なんか事件が発生した？ 誰かに事情を聞くかと考えると野次馬の中に居た1人が俺に声をかけてきた。

「真昼？」

「明久か？」

声をかけてきたのは片手にスーパーで買ったであろう食材を買い物袋に入れている吉井<sup>ミラクル</sup>明久<sup>バカ</sup>だった。丁度良い、色々教えてもらおう。

「事件か？」

「殺人事件らしいよ。真昼、やっぱりこれって……」

「待て、此処で言うな」

明久が聞きたいのはガイアメモリが関わっているかだろうかこの場で言うな、誰かに聞かれたらどうする。

「詳しく知りたいけど今は後回ししないとな」

「真昼はどうして此処に来たのさ？ 確か鳴海探偵事務所は反対方向だよな？」

「……それは俺も聞きたい」

「ウワツ!!」

突然の問いかけに2人して驚き後ろを振り返る。

「康太？」

「ムツツリーニ?!」

振り返った先に居たのは3年Aクラスに在籍する男子生徒で1年生のときからの友人で並外れたスケベ心を持ち、本心に実直な行動を取るが、それを絶対に認めないことから『ムツツリーニ』寡黙なる性識者の異名を取る土屋 康太だった。

「真昼が居るって事は『メモリ』が絡んでいるんだろう？」

「今のってどう言う事？」

「現場の部屋が異常らしい」

「異常？」

明久の疑問の声に康太が答えるが俺はその内容に絶句した。

「ああ、昨日は熱帯夜にも関わらず窓はカーテンで塞がれて鍵が閉められていたらしい。それと化粧台の鏡や姿を映す類いの物が割れたモノを除いて布や新聞紙で隠されていたそうだ」

「なにソレ？」

「…何処から情報仕入れてるんだよ」

「言って良いか？」

「止めてくれ」

真顔でそう言う康太に釘をさす。

此奴、学園内では諜報（盗撮&盗聴）・探索・ピッキングなどの技術にも優れた「情報屋」で、裏方のエキスパートとして学園長や俺も情報収集や工作の面で度々協力してもらってます。

「康太、中等部3年Aクラスの羽柴 旭の顔写真って手元に有るか？」

「現像に2日は欲しい」

「商品としてじゃないんだ。容姿を確認出来れば良い、無理か？」

「今は無いな、明日学校で大丈夫か？」

「頼めるか？」

「任せろ、ところで今回の一件と羽柴 旭は関係があるのか？」

「どうしてそんな事聞くのさ？」

俺と康太の会話を聞いた明久が康太に尋ねると驚きの返答が来た。

「現場が羽柴母子の住居だからだ」



「リュウさん」

「氷川か、何処から聞きつけたんだ？」

「別件で此処に来たんですよ、いきなり言うけど俺も中に入れませんか？」

「無理だ、と言いたいが一応理由を聞こう。それ次第だ」

明久と康太と別れた俺は警察官の中に見覚えのある人————仮面ライダーアクセル、照井 竜さんの姿を見つけた俺はリュウさんに接触し現場に入れないかを聞く。当然断られたけどな。

「現場の現状に心当たりが有る、って言ったら？」

「ガイアメモリ関連か？」

「別件、かつ同レベルの危険性がある」

俺の返事に驚いたりリュウさんは直に手配をしてくれた。

「鑑識は待避させた、中は無人だ」

「ありがとうございます、なら大丈夫ですね」

懐から取り出したシングルドライバーを腹に添えて固定されたのを確認しエターナルメモリを起動させシングルドライバーのスロットに挿し込み何時でも変身出来るように準備をする。

「リュウさんも念の為に」

「ナニが在るんだ？」

俺の行動に驚いたリュウさんの問う声に俺はこう答える。

「無い方が良いモノですよ」



「無い、か。そうだよな……」

氷川の呟く声に籠る感情は落胆と安堵が混ざり合った複雑なモノに感じた。

「リュウさん、何も動かしてませんよね？」

「ああ、鑑識が調べ始める前に一騒動合ったからな」

「一騒動？」

本来非番だった俺が喚ばれた一騒動<sup>理由</sup>を告げた。

「その鏡に怪物が見えた、と大騒ぎになった。普通なら笑い話だが風都<sup>此処</sup>ならドーパントの可能性があるからな」

「だからリュウさんが喚ばれた」

「そうだ」

俺の言葉に考える氷川は少ししてから俺にあることを尋ねた。

「リュウさん、鑑識の人達から変な音が聞こえたって報告有りましたか？」

「いや、ないな」

「化粧台の正面にあるのは神棚……失礼します」

そして氷川は神棚を漁り……ソレを見つけ出した。

「冗談、だろ」

氷川の右手に握られたのは俺が予想していたガイアメモリではなかった。握られていたのは黒や紫等の暗黒色などを背景とし中心に

渦が描かれていた絵札<sup>カード</sup>。

「氷川、それは？」

「なんで……『SEAL』のカードが在るんだ……」

To be continued……

## Fの仮面／チエツクメイト



ソレハワタシニツゲル

「私の存在を忘れてくれるならコレを渡します」

ワタサレタモノニコメラレタチカラヲオシエラレタワタシハソレ  
ヲヲウケトリ

【TEACHER!!】

ツカッタ、ワタシガテニイレルモノヲカクジツニエラレルタメニ



「……………」  
これは如何するべきかと悩む僕の耳に事務所の扉が開く音が聞こえた。

「遅くなって悪かつ……………なんだ、この状況？」

「真昼、どうしたの？」

「いや、リュウくんが連れて来てから黙り混んでるよ」

帰ってきた翔太郎とときめの2人に亜樹ちゃんが事務所の椅子の



1つを占拠しナニカを堪えている真昼について説明した事で翔太郎はある程度察してくれたようだ。

「真昼」

「…なんだよ」

「経験者として言つてやる、1人で抱え込んだら危ないぞ」

「翔兄の、勘違いだ」

翔太郎は今の真昼を見てあの時の自分とダブって見えたようだ。

まあ、僕も同意見だけどね。

「アホ、そんな表情顔で言つても説得力ゼロだからな」

「そんなに、酷い？」

「ああ、六花嬢に再会した時のお前と同じぐらいに見えるからな。愚痴ならいつでも聞いてやる」

「ありがとう」

そして真昼は今日の出来事の全てを僕達に話してくれた。

「…なるほどな」

『「ミラーワールド」か、興味深い』

「問題は真昼が閉じた『ミラーワールド』を誰がどうやって開いたかだね」

真昼の話した内容は真昼自身の『始ビギンズのナイト』に繋がるモノだった。

真昼と真昼に託した仮面ライダー達によって閉じられた筈のミラーワールドから襲撃してきたミラーモンスター。

そして『いま現在』に存在しない筈のカードが現れた事。

「俺は『SEAL』のカードが部屋に置かれたのが気になってる」

「どう言う事？」

「『SEAL』のカードは、ミラーモンスターを封印出来る効果があるカードなんだ。そしてミラーモンスターは鏡や窓ガラスみたいな『姿を映すナニか』がないと此方側に干渉出来ない」

「つまり殺された犠牲者は真昼が言った知識を持っていた？」

「そうなるし、現場に凶器が無いのも『ミラーワールド』を経由して逃げたのならある程度納得出来る」

「真昼は納得してないよね」

真昼はときめの問いに頷いてから自身の予測を語る。

「それなら【SEAL】のカードを肌身離さず持つていないと可笑しい。だから俺が考えた可能性は1つ、『犠牲者は【SEAL】のカードを万が一の保険として手元に置かなかつた』になる」

「それ可笑しくない?」

亜樹子の言葉に思わず頷いていた俺は真昼の反論を聞き何を危惧しているのかを知った。

「逆に納得出来るから。つまり被害者は【SEAL】のカード以上のモノ……例えば『仮面ライダー』に変身する『カードデッキ』を所持していたんじゃないか?と俺は考えてるんだ」



「検索を始めよう」

真昼に頼まれた相棒は早速本棚に入り情報収集を開始する。

「知りたい項目は『ミラーワールド封印解除の手段』。キーワードは、『ミラーワールド』、『ミラーモンスター』、『カードデッキ』……………駄目だ、絞りきれない」

ある程度のキーワードを入れて見たが本棚の数に変化はないようだ。

「『羽柴 寧々』……………被害者の名前は?」

「了解、『羽柴 寧々』……………先程よりほんの僅かだが減った、が時間が係る」

「なら後回しで」

「良いのかい?」

真昼の追加ワードでも特定には及ばないと告げると言うのと驚くべき答えが返ってきた。聞き返すと申し訳なさそうな顔でこう言われてしまった。

「実は他にも厄介な事が……………」

「真昼、お前の『巻き込まれ体質』酷くなってないか?」  
「言うな」

真昼から話を聞いてこう言ってしまった俺は決して悪くはない。つてか学校で依頼を受けてその途中でミラーモンスターの奇襲を受けるつて……『山陰乱戦』や『ピラミッドキャップ』も気付いたら巻き込まれていたパターンだしよ。

「それでは改めて検索を始めよう。知りたい項目はメモリの『名前』、キーワードは『記憶の改竄』、『3年A組』、『羽柴 旭』……他には無いかい?」

「フイー兄、『母子家庭』を追加で」

「先程よりかなり減つて82件残つた」

『母子家庭』で減つたつてことは……このワードも当てはまるか?」

俺が考えている間に真昼も何かを思いついたらしい、2人同時にその言葉を発していた。

「フイリップ、追加キーワードに『父親』を頼む」

「…それと『クラス担任』も加えて」

フイリップは笑みを浮かべ告げた。

「……ビンゴ。該当メモリは【TEACHER】……。後、メモリの所持者も判明した」

「やっぱり」

フイリップが告げたメモリの所持者の名前を聞きそう呟く真昼。

「聞き覚えがあるみたいだね」

「改竄範囲が1クラスの生徒だけだから『クラス<sup>集</sup><sub>団</sub>を担当する存在の影響下にある』つて可能性も有りかな、と」



「……柴田先生、ご結婚おめでとうございます」

学園内の教職員用の駐車場に車を停めた私の前にそう言つて彼は現れた。

「君は…高等部の氷川君か、どこで聞いたんだい?」

「学校中の話題ですよ、イケメン教師が大企業のご令嬢をオトした、てね」

「いや、まだ婚約の段階さ」

まさか40歳手前で結婚出来るなんて思わなかったからな……だ

からこのチャンスは逃がせない。

「なら一安心です」

「何故かね？」

「警察が先生に聞きたいそうですよ。……懐に入れている『ガイアメモリ』の入手経路についてね」

「……………」

『ガイアメモリ』について知っている？

だが次の言葉で私の疑問は消し飛ぶことになる。

「それともう1つ、羽柴 旭の行方とその母親である羽柴 寧々の殺害方法もね」

「…………その2人は何者だい？」

「羽柴 寧々は先生が14年前に別れた元恋人、羽柴 旭は別れた後に元恋人が産んだ子供で貴方のクラスの生徒だ」

彼の言葉で悟ってしまった。

彼は全てを把握していると。

「…………俺は悪くない…彼奴がいきなり現れたんだ！」

気付いたら叫んでいた。

「向こうから別れてくれと言って消えた奴がいきなり子供が居るのだとか籍をいれようとか訳分らないこと言いやがって!!」

「…………14年も前の話を今になってですか？」

「そうさ、これが産まれた直後なら納得し…………なかつたとは思うが話し合おうと思っただらうな」

「向こうから別れてしかも14年も経ってるんじや何言ってるんだ此奴？つて俺も思うな」

「そうだろう?!」

なんか氷川が俺に同情してるぞ。

「それで口論に「違う」、なんですか?」

「彼奴はいきなり俺に死ねと叫んで鏡から怪物を喚び出したんだ」モンスター

「……それって赤い鳥みたいな外見してました?」

ふざけてるのかと言われると思ったんだが……

「…知ってるのか?」

「俺も襲われました」

「よく生きてたな」

「先生もね、どうやって助かったんですか?」

「白服の男に助けられた。その時に、このガイアメモリを渡されたんだ」

この時、俺と氷川は分かり合えたと確信し懐のガイアメモリを取り出し見せる。

【TEACHER!!】

【TEACHER】……『先生』教える者の記憶を宿したガイアメモリ」

「ああ、実際使って便利な力だと分かったよ」

彼奴を返り討ちにした後で2回使用したがその効果に驚いたからな。

「Aクラスの生徒に『羽柴 旭と言う名前の生徒は居ない』と『教えた』から使用時に居なかった刀藤 綺凜を除いたAクラスの生徒だけがメモリの影響下にあった」

「大正解だ」

元々、羽柴 旭は人見知りで交友関係が狭いと事前に聞きだしていたから1回で終わると考えたんだ。

だがそれは誤りだったと今なら分かる。

「先生、今なら間に合いますよ」

「……どう言う事だい?」

『『死人に口無し』……弁護士雇って上手くやれば正当防衛を勝ち取れ

る可能性があります」

「だからこそ彼の言葉に虚を突かれた。

「意外だな、普通なら罪を償えといいそうだが？」

「生憎、俺は普通じゃない。それに罪は償うものでもない」

自嘲する彼には本当に……申し訳無いと思う。

「…無理、だな」

「何故ですか？」

「理由を話したら納得するだろう、が」

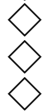
…キイイイイン……キイイイイン……

「悪いが話す気は、ない。君には消えてもらおうよ」

俺にだけ聞こえるこの音が準備が整ったと知らせてくれたのだから。

T o b e c o n t i n u e d ……

Fの仮面／始まりは再び手元に……



…キイイイイイン……キイイイイイイン…

「悪いが話す気はない、君にはあの場所で死んでもらうよ！」

警告音と柴田の宣告が耳に届くと同時に俺は側面から現れたナニカによつて突き飛ばされソコに、目に映る全ての光景の物が鏡越しで見えたかのように映る場所にして嘗て殺し合ライダーバトルいが繰り広げられた世ミラーワールド界に跳ばされた。

「……ミラーワールド?! ……最悪ヤバだ?!」

何がヤバいかというと今の俺がミラーワールドから出られる手段が皆無だからだ。

最初の時だつて『リュウガのカードデッキ』をシン兄から渡されなかつたら出られなかつたのは間違まちがいなかつたからな。最悪懐のコレを使うかど決めかねていた時、柴田の声が響き振り返った先に現れたその姿に絶句する。

「悪いね、氷川君」

「?! その、姿は……」

金色に彩られている装甲と黒色のボディースーツを纏い、契約モンスターの一部を模したであろう左腕の鋏型の召喚機バイザー。

そして腰に装着されたベルトVバックルに嵌め込まれた蟹の紋章が描かれたカードデッキ。

懐かしさすら覚えるソレは両手を上げ高らかに謳う。

「この街では僕の様な存在をこう呼ぶのだろうか？」

『仮面ライダー』と……………

「悪いが君には死んでもらうよ、僕が変身した『仮面ライダー  
ゴールドクラフ  
ンザース』の手によってね!!」

高らかに口に出すその言葉に思った事…………

「…………名前ダッサ」

ひよっとしたら俺よりネーミングセンスが無いんじゃないかと  
思ってしまう。翔兄の場合必殺技名とか良いんだよな、俺も幾つか考  
えてもらったし…………

「冗談を言えるのも今の内さー!」

考え込んでいたら接近されていたので慌てて距離を取りシングル  
ドライバーを装着、エターナルのメモリを取り出……………

「仕方ない……………無い!?!?」

慌てて辺りを見渡し…………ミラーワールドの外を映す車に落ちてい  
るのを見つけてしまった。

「最悪だ!?!」



「ちよこまかと！」

「いや、死にたくないからな」

ゴールドクラブの攻撃を全力で避け続けている俺は覚悟を決めて懐から取り出した無色のガイアメモリレを起動させた。

「悪いな先生。今の俺はギャンブラーはくや白夜だ!!」

【SHUFFLE!!】

ガイアヴェスパーが鳴り響くと共に無色のガイアメモリは俺の手を離れ、空中で目紛るしく変色しながら輝き始めた。

「さあ、ナニが来る?」

【シャッフルメモリ】

トランプで言う「切り混ぜ」の記憶を内包した「スイッチを押した者の適合率の高い記憶を宿すガイアメモリに変化する」特殊なメモリである。

だが俺はあの時の経験からこう解釈している。

『使用者が必要と思う記憶を宿したメモリに変化する』と。

だからこの状況では……ミラーワールドから脱出する為に適した手段に関わる記憶……を宿したガイアメモリに変化する。

そう思っていた。

【RYUGA!!】

だが、響いたのは始まりの……既に俺からは失われたモノ仮面の名前だった。  
「ツ?!……変身!!」

【RYUGA!!】

慌てて掴み取り、そして起動させたりユウガメモリをシングルドラ

イバーのスロットに挿し込み斜めに倒す。そして俺の体に複数の鏡像が同時に重なり、自身の姿を懐かしさを覚える物へと変化させた。

闇夜を思わせるプロテクターとボディースーツを纏う身体に  
契約モンスター  
暗黒龍の頭部を模した左腕の召喚機。

頭部に描かれた黒き龍の紋章。

そして腰に装着されたベルトに嵌め込まれた黒龍の紋章が刻みこまれたカードデッキ。

「なんだ、その姿は?!」

「……リユウガ」

驚くゴールドクラブを横目にカードデッキから取り出したアドベントカードをドラグバイザーに装填しゴールドクラブに告げる。

「この姿は、仮面ライダーリユウガだ!!」

【SWORD VENT】

認証音と共に空中から現れ手元へと落ちて来たドラグセイバーを右手に握りゴールドクラブに振り落とした。



こんな筈じゃなかった。

氷川をミラーワールドに入れて消滅させようとした。だがあのモンスターを撃退したのを思いだし確実にトドメを刺す為に変身した、それだけだった。だが現実には俺と似たような仮面ライダーに変身した氷川に圧倒されていた。

「遅いー」

「嘗めるな!!」

【STRIKE VENT】

呼び出した武装を右腕に装着し殴り掛かるが当たらない。焦る

俺に氷川はこう言っ取り出したカードを左腕の機械に差し込む。

「爪っばい武装2つで益々蟹に近付いてるな!!ならじつくり焙ってや

るよ!!」

【STRIKE VENT】

その音声と共に氷川の右腕に装着された龍の頭を模した黒い籠手で左頬を殴られた俺はその衝撃で地面へと弾き飛ばされたと同時にその言葉を耳にした。

「こんがりと、焼かれやがれ！」

「ガアアアアアアッ?!」

起き上がりかけた俺にそう叫ぶと共に突き出された氷川の右腕に装着された籠手から噴き出した黒炎に焼かれ地面に再び倒れ身体に受けたダメージの多さに踞る。そしてそれが全てを決めたのだ。

「先生、思いつきり足加減するからさ……」

【FINAL VENT】

氷川の言葉と同時に響いたのは、これ<sup>チエック</sup>で終<sup>ク</sup>わり<sup>メ</sup>だ<sup>イト</sup>とを告げる宣言。

「ハアアアアアア……」

氷川が気合いを込めた声を口から漏らすと同時に宙に跳び上がる、その周囲を黒龍が飛来し、ある程度の高さまで到着した瞬間……

「……ハアッ!!」

黒龍が放つ黒い炎を纏い、飛び蹴りの体勢に入った氷川の姿が近付いて来た。

「動くなよ!! 動くと……痛いぞ!!」

身体を起こし逃げようと足掻くが分かってしまった。

避けられない、と。

「……る……な……」

終わりたいくない！ 俺はまだ……



「羽柴 旭は？」

「駄目だ、完全に壊れてる」

ミラーワールドから無事に戻れた俺は鉄人に連絡を取り柴田を生徒の目が届かないところに持って行った後、翔兄とリュウさんを極秘に呼び出した後、柴田の住居に監禁されていた羽柴 旭を発見した訳だが……

「今は女性警官を中心に監視させている。男性が視界に入ったら恐らく……」

「最悪だ」

あの時、柴田が俺の提案を断った理由がそれだった。

柴田は羽柴 旭にティーチャーメモリを使用していた。

——— 羽柴 旭は自身が母親に売られた存在で柴田の言葉に従う性奴隷であると『教えられ』強姦されていた。———

「ああ。フィリップに聞いたが『メモリブレイクしても記憶の再認識から精神崩壊する可能性が高い』と言われたよ」

やりきれないと表情に出ている翔兄に同感しつつも俺にとっての本題を聞く。

「……カードデッキの方は？」

「真昼との戦闘の衝撃で壊れてたからな、フィリップからは使い物にならないそうだ」

「けど、ミラーワールドの調査ならコレがある」

懐から漆黒の色を宿したガイアメモリを取り出し2人に見せる。

『仮面ライダーリュウガ』の記憶が宿ったガイアメモリ、いや『ライダーメモリ』って呼ぶべきだな」

「使えるのが氷川だけなのが気がかりだが……」

リュウさんはそう言うが俺としてはエターナル以外の選択肢が出来た事に安堵していた。そんな事を考えていた俺に何か気になったのかりユウさんが尋ねてきた。

「そう言えば氷川、学校の方はどうなった？」

「突然の出来事で驚いてはいたけどそんなに騒ぎにはなっていないよ」  
「そうか」

俺の言葉に安堵する翔兄とリュウさん。

「まあ、柴田が部活動の顧問とかしなくて本当に良かった。引き継ぎもそんなにもめずに済んだって西村先生から聞いたし」

「教師達に頑張ってもらうか……学園長や西村先生はドンマイだな。まあ真昼は暫く学業に集中ってことで良いよな？」

「はいはい」

To be ……

## 主人公設定



### 主人公設定

- ・名前 | 氷川 真昼（ひかわ まひる）
  - ・誕生日 | 3月20日
  - ・年齢 | 18歳
  - ・身長 | 180cm
  - ・血液型 | 型
  - ・家族関係 | 父、母、妹2人
  - ・氷川家3つ子の長男で氷川<sup>秀</sup> 紗夜と氷川<sup>天</sup> 日菜の兄。
- 周り（両親、親戚一同を除く）から妹2人と比べられ、また比べられる2人からは慕われていた事から荒れかけていたところをある理由から花咲川を訪れた鳴海 荘吉と遭遇。
- 見知らぬ他人ということで相談という名の愚痴を聞いてもらい、その際鳴海 荘吉の提案で氷川家両親と話し合った結果、彼の2番弟子となり小学校卒業とともに花咲川から風都へと引っ越しをする。

なお、妹2人には相談せずに引っ越しをした為嫌われたと思っているが実際、妹2人は色々拗らせた結果、重度のブラコンになっているのを真昼は知らない。

・左 翔太郎やフィリップは兄弟子にあたり翔兄、フィー兄と呼び慕い、鳴海 亜樹子をアキさん、照井 竜をリュウさんと呼ぶ。

親しい間柄や友人関係を築けた相手は名前、若しくは渾名呼び（TPOは弁える）だがそれ以外の間柄だと名字呼びとなる。

主に翔太郎やフィリップの依頼の補佐、稀に照井 竜の捜査の手伝



いなどもする。

・あるガイアメモリの事件に巻き込まれ、西暦2002年にタイムスリップし仮面ライダーリュウガのカードデッキを入手しライダーバトルに参加。

その過程で手塚 海之死後のエビルダイバー、北岡 秀一死後のマグナギガ、城戸 真司死後のドラグレッターと再契約するがオーデインに変身した神崎士郎との最終決戦前にはエビルダイバーとマグナギガの2体、最終決戦時にドラグレッターを撃破されている。

神崎士郎との最終決戦時にリュウガのカードデッキをオーデインに変身した神崎士郎に碎かれ秋山 蓮から託されたナイトのカードデッキを使いナイトサブイブに変身、ライダーバトルの勝者となりミラーワールドを閉じる選択をする。その後、左 翔太郎から連絡を受けターミナルからの情報提供を受けた仮面ライダー電王、野上良太郎によって現在に帰還。

・その後、財団Xが関わった事件に巻き込まれた際に取引されていた新型ドライバーと6本のガイアメモリ、更に36本の『SHUFFLE』メモリを強奪、仮面ライダーに変身するがその事件以降強奪した6本の内、ある事情から適合率が低いエターナルメモリを使用していたが現在はある事情が解消されている。

『SHUFFLE』メモリ

・トランプで言う「切り混ぜ」の記憶を内包したメモリ。『1つの記憶を宿したガイアメモリを作成するよりも購入者の適合率の高い記憶を宿すガイアメモリに変化するメモリを作成する方がメモリ作成のコストが抑えられるのでは?』と言った意見から財団Xによって作成された特殊型メモリ。

シングルドライバー

・財団Xによつて作成された仮面ライダージョーカー、スカル、エターナルが使用するロストドライバードライバーと同タイプの次世代型ライダーシステム。右側1本のメモリスロットを備え、メモリを挿入し展開することで使用者を仮面ライダーへと変身させる。

・現時点（1話）で氷川 真昼が所持するメモリ一覧

・ ETERNAL

『永遠』の記憶を宿したメモリ。

真昼がシングルドライバードライバーで使用することで『仮面ライダーエターナル』へと変身する。

適合率が低くエターナル変身時は複数のメモリを使用するバトルスタイルをとる。

・ CYCLONE

『風』の記憶を宿したガイアメモリ。

真昼との相性が良いメモリの1つ。攻撃に風の属性を付加してスピードを高め、自在に風を発生させる。気圧変化を促す能力も備え、最大出力でこの力を取り込むと周囲の気圧が変動して風を巻き起す。

・ LUNA

『幻想』の記憶を宿したガイアメモリ。

真昼との相性が良いメモリの1つ。謎めいたメモリ。超常的な属性を付加し、肉体や武器の形状をゴムのように自由自在に変化させ変則的な攻撃が可能になる。

・ RYUGA

かつて真昼が変身した『仮面ライダーリウウガ』の記憶を宿したライダーメモリ。

その為、真昼との適合率が現時点で最も高く使用時には当時のリウウガを再現される。よつて腰のベルトがシングルドライバードライバーからカードデッキが詰め込まれたVバックルへと変化する。

## 幕間

### Hとの出会い／鏡獣襲来



拝啓……で合っていますか？

今は亡き鳴海<sup>師</sup> 莊吉<sup>匠</sup>へ

俺、氷川 真昼は学校帰りにヘリコプターから現れた黒服<sup>知り合</sup>さん達に拉致られ空の人になってます。

……ガチで。

「弦巻邸まで何分位掛かります？」

「後20分になります」

「……こころに呼ばれるのはかなり久しぶりなんですけど？」

直接会うのは2年ぶりか？ 電話やLINEでのやりとりはしてたけどな。と言うかこころなら直接会いに来ないかと考え黒服さんに聞いてみたら……

「旦那様から『風都』と真昼様がある程度落ち着かれたと聞いたそうで……」

オジサンに止められていたのだと納得したので俺も黒服さんに言葉を返した。

「……こころを『風都』に行かせる選択肢がないなら俺に来てもらえば良い、と考えたと」

「はい、それと真昼様に相談したい事があると旦那様が」

「相談？」

ある意味、<sup>フルーツの神</sup> 鎧 武が居た『沢芽市』に並ぶ魔都だしな風都。しかも現在進行形でだ、なら仕方ない……のか？

「俺も用事が合ったから今回は渡り舟って事で納得します」  
実は俺のオートバイ<sup>バイク</sup>エンジン<sup>エンジン</sup>、メンテナンス中だったから足が無かったんだ。ここは電車代とバス代が浮いたと思えば良いのか？



その日はこころちゃんのこの言葉で始まりました。

「皆、居るわね」

「どうしたんだい、こころ？」

「皆に紹介したい人がいるの！」

薫ちゃんの問いかけに紹介したい人がいるの、とこころちゃん突然が言い出しました。

「ミッシェル呼んで来る」

そう言つて美咲ちゃんはミッシェルになる為<sup>着替える</sup>に部屋から出て行つた。

「入つて良いわよ」

「失礼する、暫くぶりだな……こころ」

そう言つて入つてきた男の人はこころちゃんの両頬を摘まんで引つ張つちやつた?!

「にやああああ?!」

「わあ、よく伸びるな」

凄くイイ笑顔で引つ張つちやつてるよ!

「なにや、にやめ……」

「止めてほしい? だが、断る!」

暫くお待ち下さい (b y??)。

えっ?! 貴方誰? (b y花音<sup>私</sup>)

「酷いわ、真昼!」

「ごめんな。つい……」

「「……つい?」」

若干涙目になったこころちゃん可愛いと思いながら薫さんとはぐ

みちゃんと一緒にこころちゃんの反応に驚いた。

「ところでこころ、そちらの人達は誰？」

「私の友達でバンドのメンバーよ」

「こころもバンド作ったんだ。なら名前と担当パート教えてもらって良い？」

そして私達は男の人、氷川 真昼さんと自己紹介をしました。



こころの友達、『ハロー、ハッピーワールド』略称「ハロハピ」のメンバーと自己紹介をした俺は最後のメンバーが来るのを待っていた。

「みんな、ミッシェルが来たわ」

「ミッシェル？」

名前の響きから最後のバンドメンバーは外人か？と軽く考えていた。だから反応が遅れた。

扉が開くと同時に現れたのは『トップレベル世界級のガン普拉ファイター』にとって強烈な心的外傷トラウマを与えた存在と瓜二つだったからだ。

「?!?!?!?!?!」

だから俺が咄嗟に距離を取ってシングルドライバーを装着し対応力に優れた『エターナル』のメモリを構え起動させかけたのは当然の反応だった。

「真昼さん？」

「真昼？」

そんな行動に困惑するこころ達を意識外に追いやると同時に違和感を覚えた。

（おかしい？ ヤツが相手なら俺は今頃殺ヤられている筈だ！なのに何故俺は生きてるんだ?!）

今までの人生で一番動揺している自信がある俺は一度大きく深呼吸。そしてある程度冷静になる。

「……こころ」

「どうしたのかしら、真昼？」

「その、ピンクのクマさんは何だ？」

「ミッシェルのことかしら?」

「…ミッシェル?!:…」

目の前の『悪夢が具現化した存在』の名前がミッシェルだと知った俺は慄きながら起動させかけたガイアメモリを懐に直す。

「真昼さん? どうしたんですか?」

「松原さん、ミッシェルとは会話出来るかな?」

『出来ますよ』

ミッシェル、喋れるのかよ?!

いや、それよりも確認が先だ。確認しなきゃダメだ!!

「ならミッシェル、聞きたい事がある。ミッシェルって家族居たりする?」

『妹がいるよ』

「妹?!」

妹だと?! まさかヤツがそうなのか?!

ならミッシェルも……

「真昼さん、さつきからどうしたんですか?」

「俺はミッシェルの妹に会った事がある、かもしれない」

俺の発言にこころのバンドメンバー全員が驚く。

「それは本当かい?」

「ああ」

瀬田さんの問いかけに俺はこう答えていた。

「名前は『デス・ベアー』。両目と両手と腹部の☆から光線を発射して両腕はロケットパンチが可能で分離した両手はガンプラを掴んだ瞬間に融解させるビツクリ兵器、物理攻撃は足止めすらできないガラクタ同然……人間が生み出した世界を導くモノを相手にするどころか軽く凌駕出来るに違いない悪魔だ」

.....

・  
・  
・  
・

「「「なにそれ？」」」

うん、当然の反応だよな。

と言うことで『布教用』に配られた『幻の一戦』を上映しました。

以下、上映会登場人物達の会話や画像の一場面から抜粋。

ナンダアレハ?!

クマガ、ピンクノクマガ:

オイ、メカラビーム?!

キョシンヘイ??!

ピンクのクマ達に蹂躪される数多の宇宙戦艦。

ヨクモヤツテクレタナ!!

ジツダンハコウカガナイノカ?!

シマツ?!

アシダ! アシヲネラエ!!

1機、また1機と戦場から姿を消すMS達。<sup>ガンブラ</sup>

ナンナンダヨ、アイツハ!!!  
イカナイデヨ、バーニイー!!!  
カアサン、ボクノ…ピアノノ…  
タイサアアアアア!!!

響き渡る絶叫。

断末魔の断片が漂う戦場。

そして……

オレハアメリカノガンブラファイターダアアアア!!!

アトハタノンダゼ……アイボウ!!

……ダカラサア、ネライウツゼ!!

コノシユンカンヲマツテイタンダ  
!!!!!!

……悪夢は絵わりを告げた。

「これを観た感想をどうぞ」

俺は上映会を終えた後、観客の皆様に見つけていた。

「ミッシェル凄い！」

「……うん、凄いネ」

北沢さんよ、あれミッシェルちゃん……デス・ベアーや。

「参加者の皆さんは大丈夫だったんですか？」

「シミュレーションを使ったバトルだったからな……ガンブラ本体に被害はないから良かったんだよな、ただ参加したファイター達は最低2〜3日は魔された」



松原さん、心配してくれてありがとう。

「真昼さんは？」

「1週間は夢に出てきた」

奥沢さん、レイドラグーンの変わりにデス・ベアーが襲撃する悪夢やらターミネーターの変わりにミツシエルネーターに追われる夢、かなりのコラボのバリエーションがあつたな（ 〓 ^ ω ^ ）

「ガンプラバトルって面白そうね」

「最高、とだけ言っとく」

「こころよ、面白そうじゃないんだ。面白いんだよ。」

「真昼はどれくらいの腕前なんだい？」

「中2から高1までの3年間は世界大会の常連だった、まあ去年は色々あつて出れなかったけど」

俺の言葉に驚く瀬田さん。けど世界大会に出れるのはガンプラ業界でも色々、あつたからなんだけどな。

「じゃあ俺はオジサンに会って帰……」

……キイイイイイン……キイイイイイン……

「…ちよつと待て?!」

「あれ?この音って……」

会話を切り上げようとした俺の耳に聞き覚えがある警告音が届いた。

慌てて辺りを見渡すと同時に少し先の窓ガラスに映るありえない存在は此方側にその姿を現し俺と俺の前にいた松原さん目掛けて突撃を開始する。

「おい?! メタルゲラスってウソだろツ?!」

かつて倒した筈の存在からの突撃を松原さんを抱きかかえて回避し距離を取れた俺は松原さんを降ろしながらここに叫ぶ。

「こころ、5人で固まってる! 後、出来るだけ反射物から距離を取れ!」

【RYUGA!!】

懐から取り出したシングルドライバーを腹に添え、固定されたのと同時に懐から取り出し右手に握る黒色のガイアメモリを起動させた。

「…変身!」

【RYUGA!!】

そして起動させたメモリをシングルドライバーのスロットに挿し込み斜めに倒した。

T o b e c o n t i n u e d ……

Hとの出会い／亡霊からの依頼を聞き…

「おい!? 『メタルガラス』ってウソだろツ?!」

突然、窓ガラスから飛び出したサイのような怪物？を見た真昼が叫ぶと同時に、近くにいた花音を抱きかかえて突進をして来た怪物を躲して私達の傍に近づくと、花音を降ろしながら「ここに告げた。」

「こころ、5人で固まってる！ 後、出来るだけ反射物から距離を取れ！」

そう言い左手を使って懐から取り出した何かを腹部に添え、その何かから飛び出したベルトで固定された。そして真昼が何処からか取り出した右手に握る黒色の細長い何かから機械音が聞こえると同時に叫んだ。

「…変身！」

【RYUGA!!】

そして細長い何かを腹部の機械に挿し込み斜めに倒すと、真昼の周りで複数の鏡像が同時に重なりその姿を『仮面ライダー』に変えた。「じゃあ、行ってくる！」

そう叫び私達に背を向けた真昼はサイのような怪物を近くの窓に殴り飛ばし同時に窓に吸い込まれてこの部屋から姿を消した。

ミラーワールドに入った俺はデッキから取り出した3枚のカードを即座にバイザーに装填。

「まずは、『武<sup>準備</sup>装しましょう』だよな」

【SWORD VENT】

【GUARD VENT】

【STRIKE VENT】

召喚したドラグセイバーを左手に握り、ドラグシールドを両肩に、右腕にドラグクロウを装着した状態（命名・全<sup>フルアーマー</sup>装備）で目の前に居るメタルガラスに対峙しながら考える。

「(…これで残ったのはファイナルベントとアドベントのカードだけ、の筈)」

左側から迫るメタルガラスにドラグセイバーを振り落とした斬撃を浴びせて怯んだところを蹴り飛ばしドラグクロウを装備した右腕を構え、そこに現れたドラグブラツカーが吐き出したドラグブレスをぶつけて火達磨にする。

「(…やっぱりこのリュウガの記憶が何時のリュウガのだったのか確かめるべきだったな)」

俺の変身するリュウガには4つの分別が出来る。

シンジさんからリュウガのカードデツキを託された時。

手塚師匠さんから託されたエビルダイバーと契約した時。

北岡先生から託されたマグナギガと契約した時。

真兄から託されたドラグレッツダーと契約し、『サバイブ―烈火―』のカードを託された時。

「まあ、時間作って後で確かめるとして!!」

メタルガラスにドラグセイバーで斬撃を叩き込みドラグクロウで殴り練撃で打ち込む。だが怯むだけでメタルガラスに致命的なダメージを与えるには至らない。

「ライダーの契約モンスターだからか、頑丈だなおい！それならコイツもオマケだ！」

【ADVENT】

「ドラグブラツカー！ やれ!!」

召喚したドラグブラツカーに指示しメタルガラスの身体に巻き付けそのまま壁へ叩きつけて壁を粉碎すると同時に部屋の外の庭の地面へと叩きつける。

「此処がミラーワールドで本当に良かった!!」

【FINAL VENT】

認証音が響くと同時に宙に跳び上がり、その周囲をドラグブラツカーが飛来し、ある程度の高さまで到着した瞬間……

「……ハアッ!!」

ドラグブラツカーから放たれた黒炎を纏い、飛び蹴りの体勢で

メタルゲラス目標目掛けて急降下。

「サツサと、くたばりやがれ!!」

グオオオオオオオオオン?!!

叩き込んだ一撃、ドラゴンライダーキックはメタルゲラスから断末魔の悲鳴を上げさせ爆散させた。

「……で、何時まで隠れてる?」

戦闘の途中から感じていた視線の方向に振り返り口を開いた。

「……待て、此方に『お前』リュウガと敵対するつもりはない……」

そう言いその男は現れた。

「神崎、士郎……」

「……久しいな、『リュウガ』を託された異端児イレギュラー……」

そう言いながら、此方を見ている男の姿を確認した俺は納得する、  
がそれは即座に覆された。

「この前のミラーモンスターや、あのメタルゲラスはお前の仕業か」

「……違う。ミラーワールドは、仮面ライダーオーデイン俺をお前が倒しライ

ダーバトルの勝者となった時点で『お前の願い』によって『閉ざされた世界』となっていた。……」

「お前がミラーワールドを開いたんじゃないのか? なら、何故開かれた?」

「……『ディケイド』による破壊と創造の余波、そして『ジオウ』によるライダーの歴史を継承した事が原因の一端だ……」

「ライダーの存在と歴史が消え……、いや再構成された時に不具合がミラーワールドの封印に干渉した?」

「……聞いて、返された言葉に納得しつつ面識のある2人の仮面ライダーを思い出す。」

『ディケイド』

門矢 士さんが変身する仮面ライダーの名前だ。

俺が初めて出会ったのは『龍騎の物語』で訳あって共闘してその後も時々『手伝え』と言われ、まあ厄介事を任される相手だ。

『ジオウ』

常磐 ソウゴさん……俺は王様と呼んでいた……が変身し、とある事件で出会い共闘し最後に俺の『シングル』の力を託した仮面ライダーの名前だ。

今頃どうしていることやら……

「……………そうだ、何故か今はまだ少数のモンスターしか行き来出来ない、が……………」

「きっかけがあればその制限すらなくなるってか？ そうなればあの日の再現。引き受けるしかないじゃねえか」

「……………感謝する、受け取れ……………」

その言葉と同時に神崎士郎が投げ渡したソレを左手で掴み絶句した。

「おい、コレって?!」

「……………そうだ、お前が最後に使った秋山 蓮の『ナイト』のカードデッキだ……………」

「このデッキは、デンライナーのオーナーに預けていた筈だ。オーナーも厳重保管すると言っていたからな、なんでお前が持っている?」

「……………ターミナルだったな、そこに厳重保管されていたのを盗んできた。……………」

「おい?!」

苦笑しながら言うなよ、と思いつつ受け取った時に気付いた違和感について聞いたです。

「で、カードデッキの色がサバイブ体の時と同じなのは何故だ?」

「……………閉ざされた世界となっていたミラーワールドはお前に分かりやすく例えるなら『蠱毒』の状態だな。ライダーバトルの時に比べるとミラーモンスター達が強くなっている……………」

「サバイブ体じゃないと危ないのか」

「……………今のお前なら問題ない筈だが、万が一に備えた結果だ。それと幾つかのカードを足している。お前なら上手く使えるだろう……………」

「いたせりつくせりだな、俺に何を望む？」

最悪ライダーバトルを終わらせた俺を抹殺する為に仕組んだと言われても俺は頷ける。

「……………コアミラーを壊せ、そうすればミラーモンスターは生まれない。……………俺と妹の思い出を、見知らずの他人に使われることなくなる……………」

「けど、この言葉を聞いて俺は納得し告げた。

「その依頼を、引き受ける」

「……………感謝する、氷川 真昼……………」

「そう告げ神崎士郎は消えた。」

To be continued……

## 嵐と守護者と騎士達と

「……『旭湯』って此処だったんだな」

六花のLINEで送られた集合場所は実は前に来たことがある場所だった。

「親父と来たのが風都に行く直前だから5年振りくらいか……時の流れは速いな」

昔を懐かしく思い暖簾を潜り抜け中に入り中に居た人に声をかける。

「お婆さん、お久しぶりです」

実は『旭湯』、俺と親父が2人だけで通う行きつけの銭湯で経営者であるお婆さんとも実は顔見知りである。しかも六花の一件で話す時に会ってお婆さんの方が先に俺に気付いたので世間って狭いなあと思ったもんだ。

「ホントに久しぶりだね、真昼君」

「六花は？……っ!!」

和やかに話している最中に感じた気配に反応して振り向いて飛び込んできていたアイツ、ギターの基本を教えた弟子にして大切な相棒<sup>ベット</sup>？である朝日六花を受け止めた。

「なんで抱きついて来るんだよ?」

「補充や、マヒルニユウムを補充するんや」

「そんな物質はねえよ」

「ぶう」

「……帰って良いか?」

「…ヤダ」

やばい、拗ねた六花も可愛いと思う俺は末期かもしれない。

「さて、六花。なんで仕事用のスタックフォンで連絡したんだ?」



「実は相談とお願いがあつて」

「…相談の内容は？」

「学校で出来た友達から相談を受けました」

部屋に入ると同時に師匠にそう尋ねられた私は師匠を呼んだ理由を話した。

「友達がストーカーにね。で、そのストーカーがドーパントか同等の驚異の可能性がある、六花はそう考えているんだな。それで対抗手段として……」

「はい、師匠に預けている『私用のシングルドライバー』と『本棚』の閲覧許可がほしいんです」

「良いぞ、シングルドライバーと六花のメモリは丁度渡そうと思って持ってきてるからな」

「そこをなん……つて良いんですか?!」

あれ？ 反対されると思つただけど？

私の疑問に思っていることが表情に出ているのだろう、ため息を吐いて理由を教えてください。

「厄介事に巻き込まれた時用に必要だろうからな」

「『財団X』ですか？」

「いや、鏡の世界からコンニチハだ。それでだ、コレ押してくれ」

そう言つて投げ渡されたのは私達には見慣れたモノ。

「【シャッフル】メモリ？」

「占つたら、これから必要になるメモリになる。と出た」

そう言われた私は渡されたメモリのスイッチを押す。

【SHUFFLE!!】

鳴り響くと共に無色のガイアメモリは、空中で目紛るしく変色しながら輝き始め、そして……

【RYUKI!!】

そう響いて赤色に染まり私の手元に落ちた。

「『龍騎』……やっぱり『ライダーメモリ』になったか」

それを見て懐かしそうに、そして泣き出しそうな表情をする師匠が居たが、それを振り切り切るように懐から取り出したモノを私に渡した。

「ほれ、六花用のシングルドライバーと【ストーム】と【ガーディアン】のメモリ」

「躊躇わずに渡しましたね、ちよつとびっくりですけど」

そう言つて片手を俺に向けて伸ばす動作をしたので仕方なく口を開く。

「……【エターナル】は流石に渡せないぞ、アレがないと俺が困る」

「困るつて……」

「いやいや、『ウィザード』のメモリは私を持つてるけど師匠にも【ルシファー】と【ブレイカー】があるよね？」

「師匠の【ウィザード】のメモリ返しましょうか？」

「いや、そうじゃなくてな……言つても怒らない？」

「内容次第です」

「実は……『シングル』に変身出来ない」

「……はい？」

躊躇<sup>言</sup>う師匠からの新情報、なので詳しい説明を要求。

説明を聞いた私は、すーっと息を吸い込んで……。

「この、大馬鹿者おおおおおおおおおおおおお  
!!!」

「……すいませんでした……」

あらん限りの力で……あり得ないと叫んだ。多分伯母さんにも聞

こえただろうけど、私は気にしない!!

「お仕置きです！ 師匠は後でお仕置きします!!」

「……優しく、頼む」

「「ストーム」と「ガーディアン」のメモリ私の適合したメモリを懐に直して、渡されたシングルドライバーを装着して師匠がライダーメモリと呼んだメモリを右手に構える。

「六花、大丈夫か？」

「師匠が無茶するよりマシです」

「……そうか」

「はあ、と溜め息をつきながら師匠は青色のケースみたいなソレをズボンの右ポケットから取り出す。

「師匠、シングルドライバーは使わないんですか？」

「ああ、六花には話してなかったな。俺もコレをまた使うなんて思いもしなかったよ……俺のカードデッキじゃないしな！」

「そう言つてカードデッキを持った右手を窓に向けた。」

すると窓ガラスに銀色のベルトが映り込み、それが師匠の腰へと移動し装着された。

「窓ガラスからベルトが出た!？」

「本当に懐かしいな、……六花準備しろ」

「了解」

【RYUKI!!】

慌てメモリのスイッチを押してシングルドライバーのメモリスロットに挿し込むと同時にこの言葉を、そして師匠は右手のカードデッキをベルトの中央に挿し込むと同時に叫ぶ。

「「——変身!!」

【RYUKI!!】

そして私達の体に、いくつかの鏡像が同時に重なり、私達の姿を全く違う物へと変化させた。

「……まさか『ナイト』にまた変身出来るなんてな」

感慨深く呟く師匠の姿は蒼と金の鎧と黒のボディースーツを基調とした正に騎士ナイトと言った外見だった。

「真つ赤、それにこれってドラゴンの頭？」

一方、私の姿は銀の鎧と赤のボディースーツを基調とし左腕に龍の頭部を模したガントレットか装着されたものになっていた。

「じゃあミラーワールドに入るから、俺の左手を掴んで足の力を脱いでろよ」

「はい」

「では鏡の世界へレッツゴー」

そして私は窓ガラスに右手を差し出した師匠と一緒に窓ガラスに吸い込まれて

窓ガラスから飛び出して自分の部屋に着地した。

「私の部屋ですよね？」

「窓から外を見れば違いが分かる」

言われて窓から外の景色を見ると違和感を感じた。最初は分からなかったが少し考えるとをよくわかった。逆さかさまなのだ。そう、いつも見る景色と左右が反転していた。

「ようこそ、鏡ミラーの世界へ。ちなみに時間制限があるから聞きたい事があつたら早めにな」

「じゃあ早速、制限時間って何分ですか？ あと制限時間超えたらどうなります？」

「聞いた話だと9分55秒。それを過ぎたらもう人生サヨナラ？」

「さよならって……」

呆れた顔をした私を見た師匠は普段はしない真剣な表情で私を見て説明する。

「文字通り人生が終わるんだよ。体が粒子化して何も残らない、ちなみに9分55秒これってライダーで、だからな。一般人だと1〜2分が限界か？ しかも自力で抜け出せないから文字通り人生が終わる」

「本当ですか？」

「こんな嘘つかねえよ！ だからしばらくは、シングルドライバーとライダーメモリは肌身離さず持つといってくれ。後、御守り代わりも渡しとく」

「了解です」

「よし、ならまずこれの説明だな」

そう言っただけにはめられたデッキからカードを取り出す。

「まずデッキからカードを取り出しバイザーにセットする。龍騎<sup>六花</sup>の場合は左腕の機械にカード差し込む、一回デッキから取ってみろ」

言われてカードデッキからカードを一枚取り出した。

「ソードベントのカードか、丁度良いな」

取り出したカードには上の中央部に【SWORD VENT】と書かれて、左端には竜の紋章が描かれて真ん中にはゲームに出てくるような剣の絵が描かれていた。

「まず左腕のドラクバイザーの上の部分を前にスライドさせて開いた部分にカードを差し込んで、スライドさせた部分を戻す」

【SWORD VENT】

言われた動作を行なうと、機械音が響いたと同時に上から降ってきた剣を掴み取った。

「こんな感じで武器を呼び出す、後は特殊カードなんだけど龍騎にはないんだよなあ。ナイト<sup>俺</sup>にはあるから使ってみるな」

【COPY VENT】

響くと同時に師匠の右手に私が握っていた剣と同じ剣が握られていた。

「武器をコピーしたんですか？」

「後は、分身とか超音波とか無効化とかかな」

ナイトはな、と呟き次に取り出したカードを私に渡して使ってみてくれと言うのでさつきと同じ動作をした。

【TRICK VENT】

すると師匠が増えた。

「分身の術ですか？」

「いや、トリックベントの効果だ」

「私がいきましたよね？」

「北岡トリックだ」

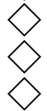
「いや、何ですかそれ？」

説明説明と促すと師匠の身体全体から粒子の様な何かか吹き出していた。

「なんやこれ?!」

「あ、時間切れだな。あつちに戻って説明するよ」

その言葉に頷いて私と師匠はミラーワールドから飛び出した。



ミラーワールドから出た俺は『SEAL』のカードを六花に渡した後、部屋の窓を開けて招き入れる準備をする。

「それとストーカー対策だが『彼等』に協力してもらう」

「……猫笛?! まさか……」

驚く六花を尻目にある存在達に伝わる合図を吹いた。そしてそれが聞こえてから暫くして彼らは六花の部屋にある開けられた窓から部屋へと入ってきた。

「…ミケ」

にやー

「…マカロン」

にやー

「…ニヤン吉」

にやー

「…ソプラノ」

にやー



にやーにやー♪

俺とゆきニャーは胸を張って、六花に視線を向けた。

「ほら『その通り』って言ってるじゃないか」

「…同じ学校の制服なんですけど」

「……そうなのか」

マジで？

勢いで誤魔化せないかな……

「学校で会った時、すごくすごくくきまずくなるんですけど」  
気持ちにはよく分かる、けど他人事なので俺はこう答えた。

「……笑って、受け流せ！」

「無理無理」

T o b e c o n t i n u e d ……



## 2話

Kを纏う者達／風の祭りは賑やかに



今日の天気は雲ひとつない青空。 そんな日に俺は………「M<sup>ムツ</sup>ス」(キグルミ)を装着し風都市主催『ゆるキャラ・ランニング・ラン!』の参加者の1人としてスタート地点に立っていた。

「……いざ本番になったら頭痛くなってきた」

何故に氷川<sup>俺</sup> 真昼がこの催しに参加することになったかと説明するには日付を10日ほど前に遡らなければいけない。

——10日前——

その日、俺たち『鳴海探偵事務所』の面々(フイー兄除く)は風都市役所にある地域振興企画課の応接室に案内された。

「初めまして地域振興企画課、課長の音羽 清十郎と申します」

名刺を受け取り翔兄、アキさん、とき姉、俺の順に自己紹介と挨拶を交わし準備された椅子に腰を下ろす。

「単刀直入に言います、ガイアメモリ犯罪専門の探偵事務所<sup>駆け込み寺</sup>として名高い貴方達のお力をお借りしたい」

この言葉に応接室に緊張感が生まれ、それに後押しされた翔兄が口を開く。

「詳しい話をお伺いしても?」

「はい、皆さんは10日後に行われる風都市主催『ゆるキャラ・ランニング・ラン!』を<sup>ご</sup>存知でしょうか?」

音羽課長の問いかけに俺は昨日教室で明久達が話してた内容を思

い出した。

「出場者が自身で用意した着ぐるみを装着して決められたコースを走るんですよね？ 確か優勝賞品が温泉旅館のペアチケットで上位入賞や参加賞も風都市で使える商品券みたいにそれなりの品物が用意されていて明久<sup>クラ</sup>、雄二<sup>スマ</sup>、康太<sup>イト</sup>の3人がゲットしてやるぜ!! っていうたの覚えてます」

「元々は最近客足が遠のいている温泉街や観光地、商店街などに注目を集めさせるために行う企画の1つだったので商品もそれなりに派手にしたんですが……4日程前にこのようなものが届きまして……」

そう言って音羽課長から翔兄へと渡された封筒とそれに入った犯行声明文に目を通した。

此度行われる催しはこの町の静寂を乱す愚かな行いである。我らは愚かな行いに加担する愚者達に万能の小箱が齎す力を用いて死の制裁を下す。

おお、お約束<sup>テンプレ</sup>の様な脅迫文だ。 けどなあ……俺がある疑問にぶち当たるがそれは翔兄も同感だったらしい。

「脅迫文か……音羽さん、質問よろしいでしょうか？」

「どうしましたか？」

「この脅迫文が依頼を出そうとする原因なのは理解出来ました。ですが脅迫文だけが原因なのですか？ これだけで我々に依頼を出そうとする理由成り得るのか疑問に思えまして……」

そう、それが俺が疑問に思ったことだ。こういう場合はまず警察に秘密裏に相談する、これが外部<sup>マスコミ</sup>にバレた場合間違はなく今回の企画に悪影響、最悪の場合中止の可能性も出てくるからだ。

「警察には既に相談済みです。実は脅迫文と一緒にコレも一緒に送られてきました……実物は警察にお渡ししています」

そう言って証拠品を入れる袋に入れられたモノが撮られた映像を見せられ、それは俺達には非常に見覚えのあるモノだった。

「コレってガイアメモリじゃん?!」

「……マジ？」

「コックローチのメモリか、なるほどこれもあつたからか」

驚くアキさん、とき姉を横目に写実物を撮られたモノ 真を見た俺と翔兄は逆に今回の処置に納得した。

「態々送りつけるってことは複数所持してると考えても可怪しくないよな」

「……だよねえ、1つ手放しても問題ないってことでしょ？」

「しかもコックローチのメモリって何気に高性能で使用者のハードルも低いメモリだもんな」

ガイアメモリに関わる側である『鳴海探偵事務所た』の言葉に音羽課長は頷く。

「実は、風都警察署の超常犯罪捜査課の方々に既に相談しており……その際に彼等からも貴方達を推薦されました」

「…翔兄、俺はこの依頼を受けるべきだと思う。　　とうかまずりユウさんに聞いた方がいいんじゃないかね？」

「だな。その前に亜樹子、お前は照井から話聞いてないのか？」

「いやいや、私も今聞いたばかりだって！」

アキさんの言葉を合図にして翔兄のスタックフォンに着信が入り慌てて翔兄が出て少し話し込んで通信を切った。

「翔兄、誰から？」

「フィリップだ、事務所に照井が来てるそうだ」



「それで照井？何で話さなかったんだ？」

「いや、話を通すつもりだったんだが少し厄介なことが分かってな」

「厄介ってリユウ君、どういうこと？」

市役所から帰り着いた俺達はフィリップと入れ違いで来たらしい照井に出迎えられる今の会話となる。

「真昼がそれなりに関わる可能性が出てきたから調べていたんだ」

「俺が以前血祭りにした奴等がコンニチハしに来たとか？」

真昼は冗談めいて言うがそれだったらかなり拙い事になるんじゃないか。

「良く、分かったな」

「マジ?!」

溜め息を吐く照井の言葉に驚く俺と真昼と亜樹子の3人、フィリップは事前に聞かされていたのか平然としている。

「真昼って不良だったの?」

よく分かっている、というより付き合いが浅いときめは真昼のヤンチャを知らないからの問いかけだった。

「…不良ではない、かな?中3の時に少し荒れてたんだ。その後、伝手で剣術を教わり武芸者になり高1の初めで『亜種<sup>魔術</sup>聖杯<sup>儀</sup>戦争』に巻き込まれて魔術業界に片足を踏み込んでね」

フィリップがしみじみと真昼の辿った足跡を語っている。

「夏休みに六花ちゃんの一件で仮面ライダーになって色々あつて……」

亜樹子も思い出しながら呟き…

「それも2年の夏で決着をつけて、平穏な日常コンニチハと思いきや冬休みに『聖杯大戦』に関わり…ラノベが何冊も書けるような出来事の連続だな」

真昼が締めて終わった。

「物騒な人生だね」

「否定できねえ、しかも女性関係は現在進行形で薄氷の上に立ってる状態だからなく」

ときめの感想に（▽）アハハ!と投げやりな笑い声を出す真昼は放っておく、ああなつたらしばらく戻ってこねえし……

「話していいか?」

「どうぞどうぞ」

亜樹子が俺たちを代表して照井に続きを促す。

「音羽課長から通報を受けたのが4日前だったんだがその前の日に囚人が1人脱獄した」

返ってきた言葉に全員が啞然とした。

「リュウさんが関わって、俺関係でかつ刑務所収容者、かつ風都に関わりある……メモリ犯罪の前科持ち？」

意外と早く帰ってきた真昼の眩きに疲れた溜め息を吐く照井が頷く。

「真昼、正解だ。そしてこれが情報をまとめた資料になる」

そして渡された紙束の一番上のヤツに俺達は目を向ける。

「こいつって、あー『蒼炎群』のボスポジションだったゴリラか」

「収容されたのはメモリの毒素というより真昼によるトラウマ治療を目的とした医療刑務所だった」

見覚えと言うか心当たりがあった真昼が心底納得していたが俺達は全く分からないから2人に尋ねることにした。

「リュウ君、説明よろしく」

「真昼、お前も説明しろ」

亜樹子と俺の言葉を受け2人は口を開き語る。

死神に魅入られた男達と関わるはめになった墮天使の1幕を。



昼休みになり各々昼食タイムに入る。去年までの俺なら食堂か購買に並んでいるだろうが今年は違う。

「いやーAクラスって本当に素晴らしいな、淹れたての紅茶が出来るなんて最高!!」

「真昼、なんで紅茶なのさ？」

「お前食に拘る奴だったか？」

明久と雄二は失礼な事を言うてくるから注ぐのを終えて反論することにする。

「いや、杉下<sup>知り合</sup>警部に勧められたのもあるけど基本こだわるぞ俺」

「そうなんだ」

「まあ無人島生活もしたからある程度までグレート下げれるぞ、俺」

訃堂の爺様や八紘オジサンとやったからな。

『刃物一本で1週間生活しよう』をな。

「明久達こそ休み時間にプリントと睨めっこなんて珍しい光景で何か起きるか心配で仕方ないんだが」

「言いたいことは良く分かるが失礼だろうが」

「そうだよ、僕達なんだと思ってるのさ」

雄二に明久、お前達を何だと思ってるだど？

「FFF団より（色々な意味で）マシな（元）バカ達だと思ってるがそれがどうした？」

「否定できない」

そうだろ？ FFF団を比較対象にするのは明久達に申し訳ないが身近な例えがそいつらだから仕方ねえじゃん？



「まあ話の本筋を戻そうか。そのプリントって何だよ？」

「昨日言ってた『ゆるキャラ・ランニング・ラン！』の参加申込書、提出日はあと3日だから急いでまとめるんだ」

「今はどれを使うか相談中なんだよ。ちなみに候補はコレ」

そう言ってる真昼に写真を見せたけど反応が酷い。

「ふなっしーとくまモンとなまはげと鎧武者？」

「鹿児島のご当地ヒーローで『薩摩剣士隼人』って言う名前らしいよ」

「ゆるキャラじゃなくて仮装になってるじゃねえか？」

「一応確認したがOKらしいぞ」

「なんでだ?!」

驚く真昼って珍しいのが見れたから真面目に答えようと。

「第1回だから枠は相当広いらしい、今回分かった問題点とかを次回開催の際に修正するそうだ」

ムツツリーニのこの言葉に納得したのか真昼は紅茶三杯目で菓子パンを胃に流し込んで片付けを始める。

「経験者として一言、『万が一』に備えて動きやすさを重視するべきだと言っておこう」

そう言ってる真昼は教室を出て行った。

「ガチャピンとムックを装着してFFF団とバトってる男の言葉は重みがあるな」

「全くだ」

「それで、どれにしようか？」

ムツツリーニと雄二が和やかに話すが僕は何か引つかかった。



ホームルームが終わった俺はスタグフオンに届いたメールを見て再び市役所の一室を訪れた俺は昨日のメンバー+2人に出迎えられた。

「翔兄、事件に動きがあったって書いてあったけど……そちらの2人は？」

「ひったくりに襲撃された風都君のスーツアクターの富士見ナオさんと事務局長の深澤さんだ」

「なんですと?!」

「え？風都君の?!サインください!!」

「後でで良いかな？」

興奮した俺はちよつと困った顔でナオさんに言われて冷静になって慌てて謝り席に座る。

「すいませんでした」

「いえいえ。それより君、学生だよな？参加して大丈夫なの？」

「真昼も戦力と考えてもらっても大丈夫です。非公式ですがその資格も所有しています」

「今、話題の高校生探偵とは違うのよね？」

「勿論、寧ろ奴等のせいで日本の探偵達は迷惑を被っています」

俺の言葉に半信半疑だが納得してもらったところでリュウさんが口を開く。

「今日の午前中にひったくりの現場に居合わせた左達がそれを阻止、近くの防犯カメラに映っていたのがこいつだ」

俺に渡された写真に写っていたのは見覚えがある姿のやつだ。

「確かに『蒼炎群』に居たヤツだ。確かヒカルって名前だったか？」

「実はその時にこんなものを落としているんだ」  
そう言って置かれたのは印がついた地図の切れ端が3枚と『助けてくれ』と書かれた紙切れ。

「……やばいかも」

「どういうこと?」

『蒼炎群』のメンバ―って大体がドーパントになれるんだよ。それこそマスカレード、コックローチ、アロマカリス、マグマ。逃げようと思えば逃げられると言える。それでSOSだすって……」

あき姉の言葉にそう返したら俺の危惧していることが分かったのか翔兄が引き継いでくれた。

「例のボスゴリラ君から逃げるのを躊躇うようなやばいメモリを所有してらっつてか?」

「翔兄、その可能性が高い」

「遠距離からドローンを使って地図に書かれている場所を監視をしてみるか?」

「メモリの能力次第で誤魔化されませんか?」

あの事件がそっち系統のメモリだったせいでこの可能性が頭をよぎって仕方ない。

「調べるにしてもできるだけ準備を整えてからが妥当か。その時は大丈夫か?」

「任せろ、どのみち1度は接触する必要があるしな」

「病院のベッドを人数分空けてもらえば大丈夫、後は六花に口止めをよろしく」

「あのーすいません」

気づいたら突入作戦の話し合いになり掛けたところに深澤さんが遠慮しがちに話しかけてきた。

「どうしました?」

「実は問題がありました……」

そして話してくれた内容は少し問題があった。

「オープンングセレモニー?」

「はい、『ゆるキャラ・ランニング・ラン!』の1週間前に告知や宣伝を兼ねて行う予定なのですが……」

「確実に行動を起こしそうだな。……いや、逆に一網打尽に出来るか?」

「危なくねえ?」



翔兄の言葉に反論する俺。

俺も似たような方法やったことあるけどその時はメンバーがメンバーだったし……

「なあ、真昼。あの状態はどれくらい保てる？」

唐突にそう口にするリュウさん。

その言葉に事情を知る側が……といっても翔兄とアキさんしかないが慌てる。

「いや、照井。ソレ使ったら真昼は暫く使いモノにならねえぞ？」

「そうだよ、それに使ったのがバレたら拙い……よね？」

翔兄とアキさんの言葉はごもつともなんだけど『蒼炎群』が、俺が消し忘れた火種が今回の騒動を起こしたのかもしれないし魔術的な意味での騒動が『風都』で起きたら拙いしな。

「オープニングセレモニーの会場はどれ位の広さで？」

ナオ驚さんと深澤人さんを見る俺に視線を向ける翔兄は大体の察しがついたのか口を開く。

「この手段を真昼に取らせるなら方法を口外しないことを約束出来ますか？出来無いようなら諦めてもらいます……」

翔兄の言葉に2人は頷いて了承した。



「真昼、すまないな」

「探查範囲を会場の全体にまで抑えて余計な情報を遮断させる+αまで準備する穏便さに感謝してくれ」

リュウさんにそういう今の俺の姿は『風の契約者』としての全力開放はやったら5分でお陀仏確定なので範囲を必要最低限まで定めて負担を分担させるために礼装である「蒼衣」と破魔刀「明宵」を顕現させた状態で装備……良くてコスプレ野郎扱い、下手したら警察がやって来る姿だよ

「念のために聞くが……過激な対応だとどうなるんだ？」

「観客全員をこっちが準備する前提でのプランだからリターンは高いけどリスクも跳ね上がる」

「真昼、穏便な対応ありがとう」

オープニングセレモニー当日

俺はリュウさんと監視カメラを統括する警備室で話しながらも危険人物発見を目指し作業を行っていた。

「何らかの動きを見せてくれるとありがたいんだが」

「全く……リュウさん、中央広場の上の階にガイアメモリの反応があった」

「何?!おい!!」

「それなら8番カメラで……映像を拡大しました!!間違いないですか?」

拡大された画像のやや右寄りのところに映っていた其処に見覚えのある奴等がいた。

「ビンゴ!ヒカルと他のメンバーの2人組だ」<sup>セツト</sup>

「よし、此処は真昼に任せて俺が出る!!」

そう叫んでリュウさんは警備室を飛び出した。



テツさんの奴、本番前のデモンストレーションなんて冗談じゃねえよ!!

「光、どうするんだよ?」

「尊、最悪の場合はさっさとサツの世話になるんだよ、殺されるよりマシだろ?」

俺の言葉に今回コンビを組まされたメンバーは一瞬驚くもすぐに頷いて同意した。

「そもそも俺達はとっくに終わってたのに何でこうなっちゃったんだ」

「なら俺に話してみないか?」

愚痴ってたらずそう話しかけられて振り向くと赤一色で統一された革ジャンの男、あの時の仮面ライダーの片割れがいた。

ふう、早速2人発見できたわけだが話を聞く限り嫌々従っている……まあ真昼を相手にすることを考えればな。

「今なら俺の権限でマシンな対応をする事を誓おう」

「本当か?」

「真昼を見習おうと思ってな、今なら情報提供などで減刑を考慮する」

俺の言葉に2人は顔を見合わせ、そして何かに気付くと同時に俺を睨みつけて口を開いた。

「畜生!!もつと早く見つけてくれよ!!」

【COCKROACH!!】

【MAGMA!!】

起動させたメモリを使いドーパントとなった2人を目視した市民たちが悲鳴をあげて四方八方に逃げ出し始める。

「真倉刑事!! 避難誘導を任せた!」

アクセルドライブバーを左手で取り出し、腰に装着。ベルトが展開して巻き付いたらすぐ、右手でメモリを取り出し起動させた。

【:ACCELL!】

そのままスロットに入れ、ハンドルバーを捻り、赤いメーター状の光が飛び出す。

「――変、身!!」

【:ACCELL!!】

それが俺の身体へまとわりつき、赤く輝く装甲となる。右手にエンジンブレードを持ち、奴ら目掛けて駆け出す。

「さあ、振り切るぜ!!」

『翔兄。奴等だ、って言っても2人程度だけど出てきてリユウさんと戦闘開始、そつちに異常はない?』

「今のところ平穏そのものだ!周りが騒がしいが原因はそれだろうしな!照井の応援に行くか?」

『いや……こっちが囷の可能性があるから張り付いてて!!俺はサポートに徹するから現場は任せた』

真昼からの連絡で大体の状況を把握した俺はこっちの動きを決めるときめと亜樹子に指示をだす。

「翔太郎、どうなってるの?!」

「今、ドーパント2体と照井がバトってるらしい。俺たちはナオさんの護衛を続ける」

念の為の退路を確保しながらダブルドライバーを左手で取り出し、腰に装着。ベルトが展開して巻き付いたのを確認して相棒を呼ぶ。

「フィリップ、大丈夫か?」

『翔太郎、ドーパントかい?』

「バトってるのは照井だけだな!真昼のCANは囷だと言ってるらしい。念のために俺達も準備しておく」

『了解した。それと『蒼炎群』に関してだが気になる項目が見つかった、詳しくは「フィリップ、その話は後だ」こっちにも来たのかい?』  
気になる項目っては後で聞く、まずは目の前の脅威をどうするかだ  
:t考えながらメモリを取り出し伝える。

「1つ訂正だ。来たのはドーパントじゃない。真昼が変身したりユウガと同じカードデッキを使うタイプの仮面ライダーだ!」

【JOKER!!】

◆◆◆  
『変身!!』

【CYCLONE…:JOKER!!】

俺が現れたのを見て慌てて変身した忌々しい仮面ライダーの1人に握っていた杖を振り下ろすが少し後ろに下がって躲かれた。しかも即座に右のストレートで反撃しやがった。

これは戦闘に不向きなのですよ、しかしそれは無視できるほどのメリットも存在します

やっぱあの人が言ってた通りだ、……だったらよ!!

「来やがれ!!スネーク!!」

「翔太郎、後ろから何か来る!!」

女が叫んでせいで近くのライトから飛び出したスネークの奇襲を躲され、しかもその姿を変えやがった。

【LUNA…TRIGGER!!】

「よくも邪魔しやがったな女!!」

俺の指示でスネークが口から毒液を吹き出すけどダブルの左腕が伸びて女を掴みその場から離しやがった。

「ときめ、亜樹子と一緒にナオさんを連れて離れる。時間は稼ぐからよー!」

「分かった」

「逃がすかよー!」

俺の邪魔をするようにダブルが持つ青色の銃から打ち出されるクネクネ動く黄色の銃撃のせいで上手く近づけねえ!

「悪いな、少し痛い目見てもらうぜ!」

【HEAT…TRIGGER!!】

黄色が赤に変わってしかも今度は銃弾が炎を纏いやがった…

「くそー仮面ライダー!!今回はここで終わりだ、次で終わらせてやるから覚えてやがれ」

近くにあつたモニターを利用して俺はこの場から立ち去った。



「おいおい、モニターに吸い込まれただと。フィリップ、これってやっぱ…」

『真昼の変身するリュウガと同タイプのライダーシステムで間違いないだろう……だが違和感を覚える。翔太郎はどうだい?』

「弱すぎる。マスカレードより弱い気がするんだがどういうことだ?」

あの真昼が危険視していたにしては……と2人して考えるが真昼<sup>専門家</sup>に尋ねると決めて変身を解きときめ達に合流し話し込むところに真昼から連絡が入る。

その最初の一言がこれだ。

「もしもし、2人とも風都署の会議室に集合　OK？　リュウさんが確保した2人が話したいことがあるつてよ」

To be continued……

## Kを纏う者達／風の祭りは賑やかに2

「翔兄、ファイ兄、遅い」

俺とフィリップが風都署にある一室に入るとそこは重苦しい空気が漂っていて、真昼のこの一言で出迎えられた。

「来て早々この扱いかよ」

「翔太郎、真昼の口調がそっけない時は時は良くない情報を手に入れた時だ」

「良くない情報盛り沢山だ、というわけでもう一度話せ」

俺の愚痴を聞いたフィリップがなだめ、真昼の言葉に短く答えたその男は自己紹介をした後に真昼の口にした良くない情報の内容を話し始めた。

「俺は双見 光、『蒼炎群』のメンバーの1人だった。その前に聞いたんだけどアンタ達がダブル、なんだよな？ 今回の一件についてはこのアクセルと悪魔と同レベルの認識だと思っ**て**いいの**か**？」

「その認識で構わないぜ」

俺の返事に男は口を開き此れまでの経緯を語った。

「……きっかけはアクセルと悪魔に『蒼炎群』を壊滅させられてから全く便りがなかったテツさんから電話が来た事だ」

「……テツさん？」

俺の呟きを拾ったのか真昼が詳しい説明をしてくれフィリップが続きを催促する。

「ボスゴリラの人間名」

「なるほど、それで電話の内容は？」

「【全員に集合をかけたからお前も来い】だった。もちろん断ったぜ。触らぬ神悪魔に祟りなし、だ。そしたら家の風呂場がぶっ壊れた」

「ボスゴリラの仕業か？」

「多分な。『来なかつたらお前がこうなるぞ』って言われたぜ。俺はテツさんが何かのメモリを使ったんじゃないかと思っ**て**集合に**応**じたんだ。それで向こうでなんかのメモリを手に入れてサツに駆け込む

つもりだった」

この発言に驚かされたが真昼の返答によりある程度納得ができた。『蒼炎群』のメンバーがメモリとドーパントの存在を知ってたが故の行動なんだよ。俺とリュウウさんは納得した。問題はこの後、集合して集めた目的を聞かされて揉めた時に起きたんだそうだ」

「揉めた？」

「まあ、その真昼悪魔の容赦なさにトラウマ半歩手前の状態の奴等が【やってられるか！】て言っつてな。俺も言おうとしたんだけどヒカルに止められたんだ」

松井尊と自己紹介した男が口を開き教えた内容が気になったので尋ねる。

「なんで止めたんだ？」

「タケルとは仲が良い方だし呼び出された時の会話内容が同じか気になったんだ」

「何故？」

「ボスゴリラがメモリチェック要因としてたんだそうで井坂のような末路を危惧したんだと」

「まあメモリを持ち逃げまで考えてた俺と俺の体としてはありがたいことにテツさんが手に入れていたのはメモリじゃなかったんだ」

「2人の証言からボスゴリラが所持しているのはカードデッキ、だと思っただけど……」

歯切れが悪い真昼の言葉にフィリップと顔を見合せ俺が代表して聞く。

「思う？真昼が疑う理由は何だ」

「テツキのレプリカを見せてスネークとやらの特徴を聞いてからの推測だけど王蛇のカードデッキだと思う……けど契約してないぽいんだ」

「契約？」

「全員メモリのことをある程度知ってる前提で話す、まずドーパントって何だ？」

真昼の言葉に全員が考え込みやがて松井尊そのうち1人が口を開く。



「ガイアメモリを使って変身する怪人だろ？」

「より正確に言うなら【装着者<sup>ユーザー</sup>が自身の肉体にガイアメモリ内の「地球の記憶」を挿入<sup>インストール</sup>し、その記憶を宿した怪人となった者の総称】だ」

フィリップの言葉に頷き真昼は会話を続ける。

「次にカードデッキ、これはモンスターと契約することで完成品になると思っ構わない。【契約してないデッキは地球の記憶を入れてないガイアメモリ】と言えはわかるか？」

「つまり【コックローチドーパント】から【コックローチ】を抜いた状態<sup>状態</sup>でいいか！」

「その認識で構わない。【コックローチ】がないから空は飛べない、早く動けない、唾を吐けない、その状態を考えてみる。多少身体能力が上がるだけだろう？」

真昼の言葉に全員が納得するのかタケルとヒカリの2人は腑に落ちないと顔に出ていた。

「なあ悪魔、それならテツさんの指示にスネークが従ったのはなんでだ？契約してなければ聞かないと思うんだけど」

「だよな、テツさんの指示でスネークはヤマトとヒュウガを喰ったからな。それがなかったら誰も従わなかったと思う」

人を喰った？

この言葉に俺は驚くが真昼は冷静に言葉を返す。

「そもそもミラー<sup>ス</sup>モンスター<sup>ネ</sup>って雑食なんだよ、だから人間は普通に餌になるし、共喰いも普通にヤルぞ」

「そんな物騒な生き物が風都にいるってのか!？」

俺の言葉に顔色を変える皆に対処法を伝授する真昼。

「だから今ここ最近の行方不明者や失踪届の確認をジンさん達にしてもらってる。それにスネーク対策はこの状態でなんとかなる」

そう言って窓ガラスをカーテンで隠したりしている場所を指さす。

「なるほど、鏡面に成り得る物を隠しているのか」

「そうそう、入口がなければミラーワールドから出られない。2人に

は暫らく此処にいてもらうけどいいか?」

「命は保証してくれるんだよな」

「重要な証言をしてくれたからな、状況も状況だし減刑を確実に約束出来る」

「よろしく頼む」

こうして貴重すぎる情報を手に入れた俺たちはその日を迎えることになる。



「その前に1つ良いか?」

話がある程度纏まったのを確かめた俺は丁度良いと思つてタケルとヒカリの2人に聞いてみることにした。

「何ですか?」

「いや、真昼と『蒼炎群』が関わったきつかけって何だ?」

「それは僕も気になっていた。今回の件がなければ僕達は知らないままだっただろうし」

俺とフィリップが言うのと驚いている2人を見た真昼が口を開いた。

「実は俺もそれは気になっていた」

「当事者が何言つてやがる?!」

タケルとヒカリの2人の言葉に頷く俺達だが続く真昼の言葉に納得してしまった。

「いや、いきなり【お前の持つメモリとドライバーをよこしやがれ!!】とか言つて集団で襲つてきたから【降りかかる火の粉は火の元から消さない】の精神で相手したわけだし……当時の俺ってアレだったから」

「殺してないよな?」

当時の真昼を知っている俺が思わず尋ねたのは悪くないはずだ。

「大丈夫、全員が五体満足だった……」

「いや大部分にトラウマ作りやがった野郎が何言つてやがる?」

悲しくなるが言おうと思つてたらフィリップの奴は先に言いやがった。

「真昼は【正義の味方が市民を守らないんですか?】と煽る相手に【い

「俺が正義の味方になったんだ？」と驚きながら殺意全開の一撃を叩きつけるような人間だ。特に当時の真昼に優しさの3文字は存在しなかったと断言できる」

フリーツプの言葉にこの場にいた全員―2には深く頷いた。

「なら納得することにする。……そもそもそのきつかけは悪魔が【エターナルのメモリと仮面ライダーに変身するドライバーを持つている】って白服の女に教えられたからだ」

「『白服?!』」

「おいおい、とんでもないワードが出てきやがった!!当事者の照井と真昼まで驚いてやがる。」

「まさか財団 X か? 服装とかばつちり当てはまるけどその割には手こずった記憶がないぞ? 2人に聞くけど女は教えただけか」

「いや、メモリを幾つか貰ったな」

「薬とかそっち方面は?」

「真昼、当時を振り返りそれを聞くことはメモリ自体は大したモノはないってか……」

「俺達知る限りではなかった……テツさんがそれを隠していたら分からないと言っておく」

「これはボスゴリラを確保しないと駄目だな。2人に協力してもらおうぞ」

「拒否権ねえだろ」

「真昼はボスゴリラを確保するための策として2人を利用することにしたみたいだ。」

「ボスゴリラと電話してくれない?」

俺が考えたコレに多少のアドリブを加えてよし、そう言って話を聞きながら3分で考えたボスゴリラ挑発文章を見せる真昼に2人は顔を青ざめて反論しようとするが真昼がこの一言を告げてやめさせた。「連絡取れたら俺に変われ、面白可笑しく相手してやる。協力してくれるなら減刑を確実に実行されるよう俺が保障する」

これがトドメになったのかタケルとヒカリは頷いてくれた。

揉めなくて良かったと思つた俺は決して間違っていない。



その電話が終わりの始まりになつたと『蒼炎群』の1人は口にする。  
「おいヒカル!!何で戻ってこねえんだよ?!」

そう怒鳴り散らすリーダーを見ながら巻き込まれないように距離をとると信じられない言葉が聞こえてきた。

「テメエ、悪魔か!」

テツさんの叫び声に近い言葉にこの場にいた全員の顔色が蒼白になる。

悪魔

それは俺たち『蒼炎群』に終わりを与えた男を示す言葉。

仮面ライダーは正義の味方ではないと知らしめた男。

「日時の指定だ?!そんなこと、てめえが言える……クソがツ!!」

おい、アクマ。テツさん怒らせないでくれよ、お願いだからさ。俺達にとぼっちりが来るんだよ。

「テツさん、悪魔はなんて……」

「あの野郎、聞き入れなかったらエターナルのメモリを砕いて俺達に送りつけてやるけどどうする?て言いやがったんだよ!!」

悪魔奴ならやりかねない。

そう思いながら部屋を出て行くテツさんを見ながらこれからどうするべきか思案することになる。



「テツさん、連絡遅くなりました」

『おいヒカル!!何で戻ってこねえんだよ?!』

スピーカーモードにしているスタツグフォンから聞こえる怒声に大分苛立ってるなど思いながら続けると促す。

「すいません、俺とタケルはアクセルに捕まりました」

『なんだと!!使えねーな』

よし、チエンジ。

そう伝えると立ち位置が変わった俺が口を開く。

「おいおい五十歩百歩、どんぐりの背比べだろう?俺から見たら大して変わらねえよ」

『テメエ、アクマか!』

「いやあ、暫らくぶりだなあ。テメエの存在なんか病院から消えたって聞くまで思い出しもなかったぞ、今度は何の用だ?」

エターナルのメモリーとドライバーを狙っていたと聞いたが今でも狙ってるか分からん。財団 X らしき影が見え隠れしている以上俺の持つモノ(魔術礼装や他色々)も狙われると思っておくべきだろうなあ。

「決まってるだろう!てめえのメモリーとドライバーだ!!そして俺がエターナルになるんだよ!!」

身の程知らずと言いたくなるの堪えて俺はある提案擬きをする。

「お前がエターナルに?……俺にそんな愚物作るのに協力しろと?なら13日の14時に蛍火地区郊外にある廃工場の跡地に来い。そこでケリつけてやる、受け入れないならエターナルメモリーをメモリブレイクしてその残骸を贈ってやろうか?賢明な判断を期待しているよ」

スマホの通話を切ると周りの視線が俺に吸収していた。

「言いたいことがあったらどうぞ」

「なんで廃工場の跡地を指定したんだ?」

「ああ、そこは俺たちが大道克己と初顔合わせしたところなんだ」

「そんな場所があるのか」

「この騒動が収まった後にでも見に行ってくれ」

そしてその日を迎えることになる。



「それにしても上手くいくもんだ」

目の前で両手をあげ降参しますと言って大人しく護送車に乗る『蒼炎群』のメンバーを見て思わずそう口にする俺は悪くない。

「まー、テツさん居ないし何とかしてくれると身の安全を保障されれ

ば嫌嫌集められた連中は楽なほうに付くのが目に見えたからさ」

そう呑気に言っているタケル<sup>2</sup>とヒカリ<sup>人</sup>がボスゴリラを除く『蒼炎群』のメンバーに片っ端から説得メールと真昼の状態（いつも通りの動き）を教えた結果、形だけの戦<sup>マッチポンプ</sup>闘が行われ今の光景になる。

「問題は真昼の方だな」

「まあ本庁から人が来たって話だし大丈夫だろ」

「マツキー、その人、真昼を止められるような人か？」

「……………」

俺の言葉に黙ってしまったマツキー

「おい、何とか言ってくれ」

「…降谷警視なら大丈夫だ、と思う」

縛りだすように言うが全く安心できなかった。

To be continued……

## Kを纏う者達／風の祭りは賑やかに3



「やあ、ボスゴリラ君。会えてちつとも嬉しくねーよ」

挑発半分安堵半分籠った言葉を口にした俺に向かってボスゴリラが叫んだので応えてやった。

「おいアクマ!!エターナルのメモリは持ってきてるんだよな!!」

「此処に有る」

【ETERNAL!!】

メモリを起動させたらタダでさえ下品な顔を更に歪めて歓喜の声を上げた。

「ははは、さっさとテメーを殺してそのメモリとドライバーを貰ってやるよ」

「いやいや、【碌な死に方はしないと確定してるだろう】けどお前ごときにやられるほど諦め良くないんだ。俺は、な」

後ろの水たまりを入り口に現れたベノスネーカーを近くに不法投棄された廃車のフロントガラスから現れたドラグブラッガーに邪魔させてシングルドライバーを装着。

「ガジェットをマキシマム発動可能に調整してもらってよかったわ、変身!!」

【ETERNAL!!】

エターナルに変身した俺の言葉にボスゴリラは汚い満面の笑みを浮かべ叫んだ。

「俺が!あの人を継ぐんだ!!」

そしてVバックルにカードデッキを挿入し王蛇に変身するボスゴリラ。

この時点で俺は多少冷静になれた。

何故ならそこにいたのは俺浅倉自身が威覚変え身ている姿の王蛇だったから。

「ドーパントじゃなくて仮面ライダーに変身するなんて驚いたな。で、名前無いなら俺がつけてやろうか？仮面ライダーキングなんてどうよ」

「ザケンナー!!」

【SWORD VENT】

動揺を隠すために少し煽っただけでキれたボスゴリラはベノサーベルを装備してこっち来たよ。

「まあ、『それがどうした?』って言えるだけの差があるんだぜ。こっちにはな!!」

【HEAT・METAL】

メタルシャフトを握り左手に起動させたヒートメモリをシャフトのメモリスロットに差し込み迎え討つ。まあ使用者に一定以上の戦闘能力を与えるカードデッキを使い変身するタイプのライダーだからボスゴリラはある程度は戦<sup>出来て</sup>えていた。

「まあ……これぐらい出来ないとな!」

シャフトの先端にヒートの効力で発生した高熱を纏わせてベノサーベルにぶつけて地面に叩きつけてバランスを崩したところに勢いをつけた廻し蹴りを叩き込んで吹っ飛ばした。

「まあ、こんなものか……」

王蛇相手にどこまでやれるか心配だったが浅倉 威という狂人が変身した王蛇と比べたのが間違いだったな、これ……

「手を伸ばして足掻いた末路がこの<sup>お前</sup>程度の相手に届かなかつたら……それはそれで問題だよな!!」

【HEAT・METAL MAXIMUM DRIVE!!】

響くと同時にシャフトの先端に高温の炎が灯るのを見ながら地面に蹲る王蛇にトドメの一撃を



【UNITE VENT】

浴びせることはできなかった。

呼び出されたベノスネーカーとゴリラが一つに重なり文字通り合体したからだ。

「いや、【ユナイトベント】ってモンスター同士を合体させたカードじゃないのか?!」

さすがにこれは想定してなかった俺は一旦距離を取ろうとするが合体王蛇（以後ラミア）の口から吐き出された液体がメタルシャフトの前半分と左腕に触れてしまい煙を出す。

「浴びたら NG かよ。確かにベノスネーカーも似たような攻撃できたけどさ」

正直モンスターと戦っていると錯覚しそうになる。そして俺はどうするか思案する。

「おいおい、さっきまでの態度はどうしたんだよ!!」

しかもラミアは調子に乗って攻勢に出てくるし……仕方ない、やってみるか!!

【LUNA !!】

【TRIGGER !!】

使い物にならなくなったメタルシャフトをラミアに投げつけると同時にエターナルガンエッジ のスロットにトリガーのメモリを、ドライバーのマキシマムスロットにルナメモリをセット。

【LUNA・TRIGGER MAXIMUM MDRIIVE!!】

「トリガーフルバースト」

複雑な軌道を描きながら迫る弾幕に戸惑うラミアを横目に行動に移す。

「来てくれ、スタッグフォン!!」



「ミラーワールド突入機能を持つことは使用者によつてはかなりの利便性を持つ、と」

氷川 真昼に気づかれなないように細心の注意を払いこの戦闘を観察する私はその言葉を漏らしていた。同僚からも注意される癖だがこれは考えを口にするので思考を形にまとめるルーティンのようなもので気にしない。

『『一定の戦闘能力を与える』と言えば聞こえは良い、がそれは極限に至る可能性を狭める。やはり『サバイブ』のデータが必要ですね』

エターナルからその姿をリユウガに変えた氷川 真昼相手に防戦一方の王蛇を見ながら呟く。

「王蛇のデツキのコンセプトは『契約モンスターを追加することによつての戦闘能力の増強と戦闘手段の多様化』。サバイブは『ライダーと契約モンスターを強化することによつての性能の底上げ』と見ればいい」

そして手元に視線を移しこの姿を見ながら口を開く。

「その結果として作られたこのデツキは同種として観測されたモンスターを同一個体として契約することでそれなりの性能を与えられるようになった」

さて 『サバイブ』のデータを手に入れるために介入するか、次の機会を狙うか。上空から轟く咆哮を聞き私は次の機会を狙うことにしてこの場から立ち去った。



### 【高校生探偵】

そう聞くと思い出すのは彼のことだ。

推理シヨ主役ーの道化罪人にして数多の怨みを買って破滅した探偵もどき。

まさかこの人生でも関わるはめになるなんて思わなかった。まあ前回と言つてもいい人生よりは関わらずに済んだだけマシだろう。

それに、真昼君は彼とは明らかに違うと出会って少し話ただけで

わかった。

どちらかと言うと彼は探偵と言うより……



なんなんだよ！

「来てくれ、スタッグフォン!!」

そう叫んで呼び出したメカみたいな何かから取り出したメモリ使ってエターナルから姿が変わった悪魔はスネークと似たような龍を呼び出しやがった！

「悪いな、これでお終いだ!!」

【STRANGE VENT】

【FREEZE VENT】

それと同時に俺の体の下半身が凍り付き身動きが取れなくなっちゃった。

【STRANGE VENT】ってギャンブル性が高いんだけどその場で使えるアドベントカードに代わるからありがたい」

この状況をなんとかしようとカードを取り出したがさっきのメカがカードを持つ手にぶつかり衝撃で弾き飛ばし俺の足元に落としやがった。

「これでチェックメイトだ」

【FINAL VENT】

足掻いていた俺は顔を上に向けて……黒龍が放つ黒い炎を纏い、飛び蹴りの体勢に入った悪魔の姿が近付いて来たのを見てしまった。

「動くなよ!! 動く……後始末その他がめんどくさいんだよ!!」

身体に力を込めて凍りついた体を何とかしようとして逃げようと足掻くがどこかで分かっちゃった。

避けられない、と。

「…る…な…」

終わりにたくない！ 俺はまだ…

「クソがああああああああああつ！！!?」

……あの人を継いでない!!



「真昼君！」

周りの状況を確認し安全を確保しながら彼に近づき労う。

「降谷さん、ボスゴリラ生きてます？出来るだけ手加減したつもりなんですけど…」

「ちゃんと人間の形を保っている。それとボスゴリラが呼び出したモンスターも消える寸前だ。後はこちらで対応を……」

息を荒げて呼吸を整える彼との会話を即座に止め、2人で『今居る場所から全力で離れる!!』と叫ぶ直感に従い全力疾走を開始。

その直後に先ほどまで居た場所の地面が目で見えて解るほどに陥没していた。

「狙撃だつて？いやどこからだ?！」

「降谷さん、ここから2キロ先の建物に…来る!!」

直後に『蒼炎群』のボスの頭部が吹き飛んだ。その光景を見ながら2人で自分達の安全を確保するのが先だと決めて近くの工場跡の建物の1つに飛び込んだ。

「頭ぶっ飛んだけど何か使われたか分かります?」

「対物ライフルかな？けどこの国でどうやって手に入れたんだ!!」

「それと狙撃手もですよ！かなりの腕前ですよね!!」

言葉を交えながらも入った建物を目晦ましにして繋がってる別の工場跡に入り荒れた呼吸を整えて様子を探る。

「追撃が来ない？」

「真昼くん、狙撃手は？」

「消えてる？嘘だろう?!探知範囲にもいない？貼り直すのに5分も掛かって無いのに?!」

「追っ手は来るかい」

疲弊した彼と彼のライダーシステムが狙いかと思いい懐から銃を取り出す。

「それらしき気配はない、ですね……口封じが目的だった？」

「とりあえず緊急手配を要請しないと」

こうして主犯格死亡の形でこの一件は幕を閉じることになる。

To be continued……

## Kを纏う者達／風の祭りは賑やかに4

◆◆◆  
【報告書】

某月某日

【風都市地域課脅迫事件】と命名された一連の騒動及び関連の事件は主犯格ボスゴリラの死亡と再結成された【蒼炎群】構成員の投降により自然消滅での終結で幕を閉じた。

本件はミュージアム崩壊後流出メモリ及び財団 X と思われる何者かが提供したと思われるライダーシステム（以後、名称をチケットで統一）が使用される。流出メモリは複数を確保に成功、チケットは戦闘の余波で破壊されるも破片の回収に成功しており分析へと回す。またチケットの危険度については後日協力者 H より詳細な情報を提供することのこと。

警察庁警備局警備企画課所属 降谷零

◆◆◆  
「これは参加者登録を確認して取り下げ出来るか調べとくべきだったよな」

「次回からはそこんところを融通してほしいぜ」  
ムックスーツ  
「MS」を纏いスタート位置に向かう俺は ガチャピンアーマー 「G A」を纏い隣にいる翔兄相手に愚痴らずにはいられない。

実は依頼があったその日に俺と翔兄は参加者登録をしていたのだ。

理由としては本番当日に襲撃を受ける可能性もあったのであらかじめ潜んでおくことですぐに対応できるようにしたんだが……まさか本番当日前に解決するとは思ひもしなかつたので辞退しようとしたところ大会の規則で辞退出来ないことが判明した。

「こうなったら上位入賞して景品をゲットするしかない!!」

「ああ。目指せ、風都市内店舗使用可能商品券10万円分!!」

翔兄の目標はやけに現実的であった……

俺の目標？

決まってるだろう…

「俺は優勝商品の温泉旅館のペアチケット宿泊券を手に入れてリフレッシュするんだああああああ!!」

なお、後に修羅場の原因になるのを俺は知らないのです。



【見てきたよ】『ゆるキャラ・ランニング・ラン!』【感想を語ろう!】

1：開催側の風都市民

風都市公式掲示板のスレを立てました。

2：風都来訪のジャーナリスト

おっ、早速スレ立てか!

3：一般人の風都市民

OK! OK!! さあ、語ろうか!

4：一般人の風都市民

結果から語る？ それとも過程から語るか?

5：警備員の風都市民

まずは参加者?から説明しないか? あの見た目はインパクトありすぎだろ?

【添付：複数のゆるキャラ&ご当地ヒーローの画像】

6：開催側の風都市民

ありがとうございます。まず参加者は100人ジャスト！……収まってる良かった。

7：風都来訪のジャーナリスト

まあ、参加資格は他のイベントと比べても差はなかったな……

……参加者は着ぐるみを着て走らないといけないと言うぶつ飛んだ条件があっただけ……

8：一般人の風都市民

実際100人が着ぐるみを準備出来たのが驚きなんです……

9：一般人の風都市民

やっぱり優勝賞品とか豪華だったのもあるんでしょうか？

10：開催側の風都市民

>>>8、ええ。私たちも驚いています。そもそも第1回目ですから枠が結構大きかったのもありましたね。

>>>9、元々風都市の観光客の増加や経済の発展を狙ってましたからね。次回からは今回のような豪華な商品は少なくなります……。

11：風都来訪のジャーナリスト

そう言えば、開催日の何日か前に風都市で事件があったそうですが……

12：一般人の風都市民



……初耳なんですけど!?

13：一般人の風都市民  
そう言えばパトカーを何台か見た気が……

14：警備員の風都市民  
当日に警察官が何人か応援に来てくれたけどそのせい？

15：参加者の風都市民  
SNS見てたらみつけたけどどういう状況？

16：風都来訪のジャーナリスト  
お、参加者?! 丁度良いから話題を『ゆるキャラ・ランニング・ラン  
!』に戻そう!

17：一般人の風都市民  
……賛成!

18：一般人の風都市民  
異議無し……

19：警備員の風都市民  
15さんはどのゆるキャラorご当地ヒーローに? それと結果は  
?

20：15改めアンパンマン  
コテの通りです、因みに同着10位。

21：一般人の風都市民  
トップ10!!?

22：一般人の風都市民  
スゲエ!!

23：警備員の風都市民  
けど10位って確か4人位居ませんでしたか？

24：見に行けなかった風都市民  
はい？

25：開催側の風都市民  
新規の人に分かりやすく伝えるとアンパンマンとクマモンと鎧武者とピンクのくま（デフォルメされてた）と同着でしたね。

26：警備員の風都市民  
まさか機械を使ってゴール判定するはめになるなんて思いませんでした、と言うかよく準備できましたよね。

27：見に行けなかった風都市民  
機械判定?!

28：15改めアンパンマン  
それだけきわどかったんです。これ正直本人だから言いますけど自分遅かったんじゃないかと思ってました。

29：参加者の風都市民2改めクマモン  
まあ、あれは当事者だから言えるけどマジでギリギリのラインだったんだ。

因みに入賞商品は2万円の商品券。学生としては嬉しい臨時収入だな。

30：一般人の風都市民  
学生?!

31：一般人の風都市民  
すげーなおい?!

32：15改めアンパンマン  
ちなみに僕もです。というか同じ学校です。

33：一般人の風都市民  
学生だったの?!ひよつとして他にも知り合いがいたりする?

34：2改めクマモン  
優勝してるガチャピンと準優勝しているムックのどちらかが知り  
合いの可能性がある。

35：通りすがりのガンプライフアイター  
なあ、何でデスベアーが現実世界にリアライズしてるんだ!?



それを聞く人間はいない。  
……だが……

ははは、アイツの言った通りだ。  
分かった、よく分かった。長年、傍らに居た俺だから分かる!  
コレは間違いなく○○○だ!!

「……力を貸してください、○○○!!」

【GIN】

ソレは確かにそこにあつた。

To be continued……

## 幕間2

### Pとの邂逅／相棒と友達と猫友と

——友達出来ました!!——

スマホのLINEに届いた六花からのメッセージに、俺は思わず口元を緩めてしまう。

——良かったな!——

俺が返信すると、すぐに既読マークが付いた。

そして……

——うん♪——

その返事と共に、嬉しそうな笑顔を浮かべた女の子のスタンプと一緒にこんなメッセージも送られてくる。

——ところで、今日は暇ですか?——

そう尋ねられ、俺は少し考えた後で……

——大丈夫だけど、どうした?——

と返すと、すぐさままた彼女からメッセージが届いた。

——じゃあ、今から私の下宿先に来て下さい!——

「えっ?」

突然のお誘いに俺は驚く。

——いや、移動で少し時間がかかるぞ?……——

——いいんです。来て下さい!——

だが彼女は頑として譲らない。……

結局、押し切られた俺は、彼女の下宿先の『』に到着し、中に入った瞬間いきなり駆け寄ってきた六花に抱きつかれて……

——師匠!私の友達、紹介します!!——

満面の笑みでそう報告されて、戸惑うばかりだったのだった。

……

「お待たせしました」

暫くして、部屋の奥から現れた六花はそう言うと、部屋の中にいた2人の女の子を紹介してくれた。

宇田川あこ。

戸山明日香。

2人は同じ高校の同級生だそうだ。

どちらも同じ1年生らしい。

「この人が六花の言ってた『私が自慢出来る頼もしい人』なんだね！」  
宇田川さんは目をキラキラさせて俺を見つめる。

「はい！師匠はとても素敵な方です!!」

六花は自信満々で言うけどさ……そんな風に言われると、何気に照れるんだけど……。

それにしても……

「……どうしました？さっきから私を見て首を傾げてますけど？……」

「ああ、ごめん。ちょっと思ったんだが……戸山さんって歳が近いお姉さんっているか？」

「へえ!？」

俺の言葉に何故か宇田川さんが大きな声を上げる。

「そ、それってもしかしてナンパですか!？」

「えっ？ちがう、ちがう。昔の知り合いに雰囲気似てるなと思っただけだよ」

慌てて否定する俺。

「あー、なるほど。そういう事ですか……いますよ、1個上の高2の姉がいます」

……なるほど、確認しよ。

「名前は？」

「香澄です。戸山香澄」

ビンゴ！ やっぱり、アイツか!!

「頼む！俺の存在は黙っていてくれ!!」

両肩を掴んで必死の形相で懇願する俺。

だって、もしアイツに知られたら絶対に面倒臭い事になるに決まっ

てるからな。

でも、戸山さんの答えは意外なものだった。

「えっと、別に構いませんけど……」

「本当か!? ありがとう!!」

なんて聞き分けの良い子なんだ!!

感動しているとドス黒いオーラを纏う六花に後ろから肩を掴まれた。

「……師匠? 一体どういう事でしょうか?……」

振り返ると、そこには笑顔を浮かべながらも明らかに目が笑っていない六花の顔があった。

「あつ……」

ヤバイ! なんか勘違いしてる?!!

「まあ、まあ、落ち着いてロック。とりあえず座ろうよ」

慌てる俺に対して、宇田川さんは慌てて助け船を出してくれる。

本当に助かった。

ありがたい!! なんて良い子達なんだ。

「そうだ。立ち話もあれだし、とにかく座りましょう」

そう促すと、みんな畳に腰を降ろして座ってくれたのだが……何故か六花だけは立ったまま動かない。

「どうしたんだ?」

不思議に思っただけで尋ねると、彼女は俯きながら言った。

「師匠の隣に座っても良いですか?」

「えっ? それは構わないけど……」

「やった♪」

嬉しそうな表情を浮かべて、六花は俺の隣にちよこんと正座する。それを見ていた宇田川さんで戸山さんはニヤリと笑ってから、俺達とは向かい合うように腰を降ろす。

そして……

「ところで、お二人はどんな関係なんですか? 付き合ってるんですか?」

早速、興味津々といった感じで戸山さんが尋ねてきた。それに対し

て六花は顔を真っ赤にして否定する。

「つつつ、付き合っていないですよ!!」

「ふーん。じゃあ、どんな関係?」

「えっと……師匠は私のギターを教えてくれた仲で……えっと、えっと……」

落ち着いて考えればすぐに分かるだろうに、テンパった六花は上手く言葉が出て来ないようだった。だから、俺は代わりに答える事にする。

「今はその縁で色々アドバイスしてるんだよ」

「そうなんです! 師匠のギターは凄くてカッコいいんですよ!!」

「へえ、ちよつと聴いてみたいなあ」

宇田川さんの言葉に六花は嬉しそうに大きく何度も首を縦に振る。

「是非! 聴かせて欲しいです! 師匠のギター聴きたいです!」

「えっ? (こ)こで?」

流石にそれは恥ずかしいんだけど……。

だけど、俺の戸惑いをヨソに話が纏まりそうになっていた。

結果……

「分かった。じゃあ、せっかくの機会だし弾いてみるよ」

俺は六花からギターを借り取り出したアコギを手にとって構える。

すると六花はスマホを取り出してから俺に向けてシャッターを切る。

「何やってるの?」

「師匠の格好良い姿を撮ってるのです!」

「そうか……他に見せるなよ!」

「了解です!」

そんなやり取りをして俺が集中力を高めて一曲弾いた。

曲は昔、湊のオジさんに教えてもらった……『LOUDER』  
弾き終わると、宇田川さんと戸山さんはかなり戸惑っていた。

「ねえ、あこ。この曲って?」

「うん。『LOUDER』だよ? なんか違和感あるけど?」

2人の反応に六花と一緒に首を傾げると何か思い出したのか六花



を説明してくれた。

「そう言えば師匠、湊先輩と知り合いでしたよね？その関係でこの曲を教わったとか？」

「いや教えてもらったのゆきにヤーのおじさんだけど？」

「湊先輩、ガールズバンド組んでまして……そのバンドの持ち曲なんです」

「へえ、なるほどね」

俺達の会話で納得する2人。

「……ちなみにあこちゃんは湊先輩のバンド、『Roselia』のメンバーです」

「……なるほど、宇田川さんはかなりの腕前と」

俺の呟きにドヤ顔をした宇田川さん。

「当然！あこのドラムは天下一品だよ!!後、名前呼びで良いですよ！」  
「そっか……」

俺が関心していると、今度は戸山さんが口を開く。

「あの、私も1つ聞いて良いですか？」

「ああ、何でもどうぞ」

「お姉ちゃんはどう言った関係ですか？……」

「ああ、ガン普拉バトル関係で知り合ったんだ。けど次の大会から姿見なくなつたからそれつきりか……元気か？」

「……はい。とつても元気ですよ」

寧ろ元気じゃないかーくんの姿を思いつかないな。

「それは良かった。ところで他に聞きたい事つてある？」

「……はい、真昼さんは他に何が出来ますか！」

目をキラキラさせて尋ねてくるあこさん。

「そうだなあ……」

俺が悩んでいると六花がカンペを取り出した。

①バイクの運転（良いかも）

②変身（ちよい待ち）

③猫語（良い……のか？）

④外国語での会話（良いかも）

どれにしよう？

悩んだ末に俺はこう答えた。

「猫語が話せる」

「……………」

あれ？なんでみんな黙っちゃうの??

それに六花もさつきまであんなに騒いでたくせに急に静かになつてどうしたんだ?? 不思議に思っていると、突然あこさんが立ち上がって叫んだ。

「凄いい！凄すぎます!!是非ともあこ達に見せてください!!」

「い、いや、それは構わないけど……………」

…部屋の窓開けて、と。俺は猫笛を吹き畳の上にブルーシートを敷く。

ニャアーン

すると、どこからともなく猫達のにゃん吉が現れた。

「可愛いいく!!」

抱きかかえるあこさん。その間にもミケ、マカロン、ルビーが入室し最後にゆきにゃーが入り窓を閉めた。

「…………えッ?」

驚く2人を尻目に六花は投げやりな溜息を吐き出す。

「これで今回はおしまいです」

「…………どういうこと?」

戸山さんは理解出来ずにキョトンとしている。

「実は…………」

六花は戸山さんに事情を説明する。

「へえ、そうなんだ。…………って、ちよつと待って!!?」

そう叫んで俺から距離を取るかーくん妹。まあ、その反応は分かる。

「大丈夫。別に襲ったりしないよ」

「いえ、そう言う意味ではなくてですね…………」

「じゃあ、どう言う意味？」

「えっと、その……女の人をペットにするのはマズイと思うんです!!」  
顔を真っ赤にして叫ぶ彼女。

「……そうなのか？」

ゆきにやーと顔を見合わせるがイマイチ分からん？

「いや、明日香ちゃんの反応が普通だと思えますよ」

そう言っつて六花も同意する。

「いや、でも……俺の女性関係が……参考にしちや駄目だな」

ぶつちやけ話すと軽蔑間違いなしだからな。

「確かに師匠の女性関係がアレな感じですが……私を除いて弁明の余地有りですから！」

酷い言われようだな……。因みに六花以外にも2〜3人程弁明の余地無しがいる。

だけど、言い返す言葉もない。

「という訳でゆきにやー、人間に戻ろうか？」

「にゃ♪」

そうして、ゆきにやーは人間の湊友希那に戻る。

「……で、言いたい事は？」

俺の問いかけに顔を真っ赤にして俯くゆきにやー。そしてあこさんと明日香さんの肩に手を乗せて言った。

「忘れなさい……」

「いや、無理でしょ」

「無理ですよ」

「だよねえ……」

俺の呟きにガツクリと項垂れるゆきにやーだった。



そんなこんなで今日は解散となり俺はハジンを運転し家路を急ぐ。

………が問題発生。

「……なんか、事故でも起きたか？」

前方からパニック状態の老若男女の集団が逃げてくる。

「……マジかよ」

嫌な予感しかしない。

ハンドルを切りUターン。

アクセル全開で加速し近くの脇道に入りまる。

「何があった？」

「怪物よ！怪物が暴れてるの!!」

周りの声を聞いた俺は人目が無いのを確認しシングルドライバーを装着しリュウガメモリを起動。

『RYUGA!』

「変身！」

俺は仮面ライダーリュウガへと変身しミラーワールドに飛び込んだ。



バンドでの練習を終え、サークルを出た瞬間いきなり現れた男性が手元を持っていた何かを体に刺した瞬間、其処に化け物がいた。

全身が銀色に輝く甲冑のような姿。手には禍々しい剣。

その姿はまるで……物語に出てくる怪物みたいだった。

「えっ？何これ？何なの?！」

私が混乱していると他の人達も異変に気付いたのか騒ぎ出す。

「……ねえ、何あれ？」

「なんかのショーか？」

「ヤバいじゃん」

私達は怖くて動けなかったけど皆は違う。

悲鳴をあげどんどん人が離れていく中、怪物は一步步私達に近づいてくる。

「……嘘でしょ?……怖いよ」

誰か助けて。

そう思った時、

【STRIKE VENT】

すぐ後ろからそう聞こえたと同時に私達を飛び越えてその人は現れた。

「おい、アンタら。早く避難しろ！」

物語に出てくるヒーローのような存在がそこに居た。

T o b e c o n t i n u e d . . . .

## Pとの邂逅／繋がる縁

ミラーワールド経由で騒動の中心へと向かうとそこにはドーパントと絡まれている女子高生五人組の姿を確認し俺はデツキから取り出したカードをバイザーに装填すると同時にミラーワールドから飛び出した。

【STRIKE VENT】

召喚したドラグクローを装着し女子高生五人組を飛び越えてドーパントの前に立ち塞がるように着地。

「おい、アンタら。早く避難しろ！」

後ろに居る女子高生五人組に声をかけてドーパントと対峙する。

(まあ、コックローチ相手だけなら楽なんだけどな)

目の前のコックローチ・ドーパントを見ながらそう思っていると後ろで女子高生達が俺の声に反応したのか、声を上げた。

「あっ！仮面ライダー?!」

「本当だ！」

「え？あれが噂の？」

一体どんなウワサが流れてるんだ？と思いながらデツキから取り出したカードをバイザーに差し込む。

【SWORD VENT】

その音声と共に契約モンスターでドラグブラツカーの尻尾を模したドラグセイバーを手取る。

それを見たドーパントは俺に向かって突進を開始、対して俺は距離を詰めドライバークローで腹部を殴打し怯ませた所で再びドラグセイバーを振り下ろす。

だがそれを間一髪で避けたドーパントはバックステップして距離を取る。

……俺に都合よく、な。

「受け取りやがれ!!」

ドラグクローから放たれた黒炎、『昇龍突破』がドーパントに直撃し爆発が起こる。

「よしっ」

これで倒せただろうと確信するが煙の中から出てきたのは見ただけでも重傷なコックローチ・ドーパントだった。

「マジかよ……コイツ、耐久力あるじゃねえか……」

正直かなり面倒臭い相手だと思っていると予想だにしない事態になる。なんとコックローチ・ドーパントが女子高生達を襲おうと近づき始めたのだ。

「きゃああああ!!」

「いやあ!!来ないでえ!!」

悲鳴を上げる女子高生達を見て思わず舌打ちをする。

「ちいッ!こつちも余裕無いつてのに!!」  
返信時間

取り出した黒龍が描かれたカードをバイザーに通し叫ぶ。

【ADVENT】

「頼む、ブラッカード!!」

その瞬間上空に現れたドラグブラッカードがコックローチ・ドーパント目掛けて急降下し弾き飛ばす。

弾かれたコックローチ・ドーパントはそのまま上空高くに舞い上がり落下してくる。

「ナイスだーブラッカード!!」

そのまま地面に叩きつけられたコックローチ・ドーパントの元へ駆け出し再び起き上がろうとするコックローチ・ドーパントにトドメを刺す為のカードを使う。

【FINAL VENT】

「行くぜ!!」

空中に飛び上がると同時にドラグブラッカードが周囲を飛び回り旋回し始める。姿勢を整えて勢いをつけてから一気に降下しドラグテイイルによる必殺の一撃『ドラゴンライダーキック』を放つ。

「ハアアアッ!!」

命中すると同時激しい爆発が起きコックローチ・ドーパントは爆散、砕けたメモリの残骸を握りしめた男の姿があった。

「ふう……さてと、あの子達は無事かなって」

変身を解除してから女子生徒達の元へ向かうと五人とも怪我もなく無事なようだったので安心して一人の女子生徒が話しかけてきた。

「あ、あのー！」

「ん？」

「助けてくれてありがとうございますー！」

そう言っ頭を下げてくる女子生徒。

他の四人もそれに続くようにお礼の言葉を口にする。

「いえ、当然のことをしたままでだから気にしなくて良いって」

それだけ言うと俺はその場から離れようとした時、一人の少女に呼び止められた。

「待ってー！」

振り返るとそこには先程会った女の子戸山明日香に似てる子が立っていた。

(もしかして……)

「えーと、君は……」

名前を思い出す前にその子から自己紹介を始めた。

「私、戸山香澄です。この度は助けていただいて本当にありがとうございますーございましたー！」

深々と頭を下げる戸山さん。

それに釣られる様に残りの四人も俺に向けて頭を下げた。

(間違いない、コイツかーくんだ！)

名前が完全に一致したので改めて挨拶をする。

「どういたしました。俺は操真晴人。よろしくね」

とつさに偽名乗って俺が手を差し出すと戸惑いながらも握ってくれたので軽く握手を交わす。

すると突然鼻で俺の匂いを嗅ぐかーくん、何故だ?!

「ちよ!?何やってるだよ、香澄!いきなり失礼だろ!!」

他の4人がかーくんを引き離してくれたので助かった。



「あはは、いきなりでビックリしたけどね。それよりなんでこんな事を？」

疑問に思ったので聞いてみたら予想外の答えが返ってきた。

「……なんでウソついたのかな、まーくん？」

……バレてるやんけ?!俺の正体が分かる要素あつたつけ?……。

「なんの事ですか?……」

俺の反応を見てかーくんはニヤリとした表情を浮かべる。なお、目は笑ってない……

「誤魔化しても無駄だよ♪久しぶりだね。会いたかったよ、まーくん♪」

嬉しそうな笑顔で抱きついてくるかーくん。

「おい!やめろ!ここを何処だと思つてますが!!」

必死に抵抗するが引き剥がせない。残り4人の視線が痛い。

「場所移動して良いか?」

なんとか絞り出した一言に全員賛成してくれた。

移動中に親父に連絡をとり特捜科に出動を要請。

そして人気の無い公園へ移動しベンチに座つて一息つく。

「まさか話して直ぐに再会するとは思つてなかったよ。でもなんで分かった?最後に会つたの3年以上前だろ?」

「それは簡単だよ。まーくんからまーくんの匂いがしたからだよ!!」

「お前は警察犬かナニカか?」

思わずツツコミを入れてしまう。

「それで、なんでまーくんここに居るの?代表地区別なら違うと思うんだけど……」

「此処、地元。俺は中学上がる前に風都に引っ越したんだよ、両親・妹達は近くに住んでるよ」

「へえくそうだったんだ。じゃあ今度会いに来てね!」

「おう、それくらいなら全然構わないぞ」

「やったあ!!」

そんな感じで会話をしていると一人の女子生徒が質問してきた。

「あのお……お二人はどういう関係なんでしょうか?」

「ガンプラバトル関係、だな。もっとも一回限りでその後は会わなかったけど」

俺の説明に納得していないのかツインテールの少女が食い気味に詰め寄ってくる。

「でもさつき名前を呼び合ってしまったよね！あれは何ですか!!」

「うおっ！顔近い！あと名前呼んだのは一回限りで仲良くなったからだな。ゴーイングマイウェイを地で行ってたからな、かーくんが！」「むう……分かりました。そういう事にします、まーくんさん！あ、あと私は市ヶ谷有咲です」

そこから始まる自己紹介。

「牛込りみです」

「花園たえ」

「わ、わたひい……山吹沙綾です!!よろしくお願いしやす!!」

なんか噛みまくってる子がいるなと思ったら噛んだ本人は顔を真っ赤にして俯いてる。

「大丈夫か？落ち着いて喋れば問題ぞ」

「は、はい！すみません！」

うん、これは多分無理そうだな……

「あはは、面白い子だね」

かーくんがフォローを入れると少し落ち着いたようだ。

「よし、最後は俺だな。俺の名前は真昼、氷川真昼だ……『昼兄い?!』うお?!なんだ?」

「沙綾、どうしたんだよ?」

驚いた俺達を代表した市ヶ谷さんが山吹さんの肩に手を置く。

「ごめん、取り乱した……私だよ、さーやだよ昼兄!!」

「マジか……【やまぶきベーカリー】の……マジで?」

なんと山吹さんは知り合いです。

「え?二人とも知り合いだっただんですか?」

俺とかーくんのやり取りを見て不思議そうな表情をする牛込さん。

「ああ、此方に住んでた時は店の常連客で俺や親父がよくパン買いに行ってたんだ」

「そうそう、昼兄はよくお父さんとウチで買ってたよね」

「そうそう。たまに店番一緒にしたりしてたな」

昔を思い出しながら談笑してるとさーやがスマホを取り出ししていた。

「懐かしいなあ、昼兄とまた会えるなんて……スマホの番号教えて」  
「良いぜ、ほれ」

連絡先を交換してからかーくんが聞いてきた。

「ねえ、私とも交換してよ」

「ん？別に良いぞ」

こうしてかーくんと繋がりも出来た所で俺達は解散し帰宅後、竜さんにコックローチの一件を報告し眠りについた。

To be continued……